

# Psychosocial Research and Health Education Research into Leprosy in Central and Southern Africa : A literature review

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若林, 佳史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6660">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6660</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 中部アフリカおよび南部アフリカにおける ハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究： 文献综述

若林 佳史\*

### 要 約

ハンセン病に関して今後どのような心理社会研究また健康教育研究を推し進めればよいか、それを探るため、中部・南部アフリカでこれまでに行われてきた同領域での調査や研究を概観した。

この概観から、病者の生活状況や食物規定や葬り方の変化に焦点を合わせた調査や研究、またこの変化を念頭に置き病者らの心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

### I. はじめに

本稿は、中部アフリカと南部アフリカで行われてきたハンセン病また同病者に関する心理社会的研究と健康教育研究の文献を综述するもので、中国、南アジア、東部アフリカ、西部アフリカで行われてきたそれらを综述した拙文（それぞれ、若林 2013<sup>1</sup>、若林 2014<sup>1,2</sup>、若林 2016<sup>1,3</sup>、若林 2017<sup>1,4</sup>）の続編にあたる。

ここで中部アフリカと南部アフリカという語を用いたが、それぞれ、どの国とどの国を同地域とするか定まっているわけではない。本稿では、とりあえず、「中部アフリカ諸国経済共同体」に参加している赤道ギニア共和国（以下、赤道ギニア）、ガボン共和国（同、ガボン）、カメルーン共和国（同、カメルーン）、コンゴ共和国、コンゴ民主共和国、サントメ・プリンシペ民主共和国（同、サントメ・プリンシペ）、アンゴラ共和国（同、アンゴラ）、チャ

ド共和国（同、チャド）、中央アフリカ共和国（同、中央アフリカ）、ブルンジ共和国<sup>1,1</sup>（同、ブルンジ）の10か国を中部アフリカ、「南部アフリカ開発共同体」に参加している南アフリカ共和国（同、南アフリカ）、アンゴラ共和国（同、アンゴラ）、ボツワナ共和国（同、ボツワナ）、レソト王国（同、レソト）、マダガスカル共和国（同、マダガスカル）、マラウイ共和国（同、マラウイ）、モーリシャス共和国（同、モーリシャス）、モザンビーク共和国（同、モザンビーク）、ナミビア共和国（同、ナミビア）、コンゴ民主共和国、セーシェル共和国（同、セーシェル）、スワジランド王国（同、スワジランド）、タンザニア連合共和国（同、タンザニア）、ザンビア共和国（同、ザンビア）、ジンバブエ共和国（同、ジンバブエ）、コモロ連合（同、コモロ）の16か国と、フランスの海外県レユニオンを南部アフリカとする（アンゴラとコンゴ民主共和国は両方の「共同体」に参加している）。

---

\*大妻女子大学 社会情報学部

これらのうち、サントメ・プリンシペは、同国ではほとんどハンセン病者がいないらしいことから、本稿ではこれを除き、またタンザニアはすでに東部アフリカの一国として若林（2016）にて取り上げたことから、これも除き、いっぽう、これら以外で、コンゴ民主共和国と接するルワンダ共和国（ルワンダ）はブルンジとともに東部アフリカに含められることが多いが、若林（2016）にては取り上げなかったことから、これを加え、最終的に計 24 の国およびフランスの海外県レユニオンで行われてきた調査や研究をみていくことにする。ただし本稿が光を当てる領域の調査・研究は、主にザンビアとマラウイ、またジンバブエと南アフリカで行われているようである。

ところで、病者の心理社会面を理解するには、彼らがこれまでどのような状況に置かれてきたか、それを知らなければならない。これまで、アフリカにおけるハンセン病に関する歴史的研究は、さまざまな困難があり、総じて乏しいものであった。しかし近年、特に、アフリカに赴いたキリスト教の宣教団が残した文書や手紙をもとにした緻密な研究が相次いで公開されるようになっていく。そのいくつかについては、必要に応じて本稿でも触れる。

## II. 中部・南部アフリカにおけるハンセン病の呼称ならびに同病者および療養所

本節では、中部・南部アフリカ各国におけるハンセン病、同病者、そしてその療養所や収容所また療養村や病者村や回復者村などについて、断片的ではあるが、概観していくことにする。特にハンセン病の呼称の一つの焦点を合わせることで、直近の有病率などについては、たとえば WHO による統計書を見ていただきたいと思う。また療養所や療養村などについては、そのいくつかのみに触れることにする。

なお、病者が暮らす施設のなかには、療養所というより収容所といったほうが適切なものもあったことは承知しているが、両者を分ける基準またそれに関する情報がないことから、本稿では療養

所・療養村という語を用いる。くれぐれも注意していただきたい。

以下に、現地におけるハンセン病にあたる呼称を記していくが、正確に言えば、ハンセン病に似た症状を示す別の病<sup>2-1)</sup>も同じ名称で呼ばれている可能性があり、これについてもくれぐれも注意していただきたい。

### 1. チャド

チャドには百を超える部族が存在し、北部のサルにはアラブ人やトゥアレグ人やトゥブウ人といった遊牧民、南部のサバンナには、サラ人をはじめとするバントゥー系の農耕民が生活を営む。公用語となっているフランス語とアラビア語のほか、各部族においてそれぞれの言語が用いられる。

その部族語で話者の多いのはサラ語であるが、その一つンガムバイ語 (Ngambay) で、ハンセン病（およびハンセン病と似た症状を示す病。以下同）は *bānjī*、同病者は *njè-bānjī* という (Chata et al 2015<sup>2-1)</sup>)。

WHO の目標は 1997 年に達成されている。しかし笹川 (2010)<sup>2-12)</sup> によれば、東部・南部では、有病率、および新規患者における重度障害率が高く、子どもの新規患者も少なくないようである。

また内戦状態にある近隣国から多くの難民が流れ込んだが、そのなかにハンセン病患者も少なからず混じっていたようである (Mihimit 2007<sup>2-13)</sup>)。

ンジャメナ市のハベナ (Habena) をはじめ、各地に療養所がある (ないし、あった) ようであるが、その成立の経緯や運営の様子、また居住者の生活振りについて、詳しいことはわからない。

### 2. 中央アフリカ

中央部にはバンダ人やマンジャ人、南西部には (グ) バヤ人、そして北部には、チャドにまたがってサラ人、北西部には、カメルーンにまたがってブム人、南東部には、コンゴ民主共和国にまたがってンバンディ人といったように、80 の部族の呼び名が生活を営む。公用語となっているフランス語のほか、ンバンディ語、またこの二つが混淆してできあがったサンゴ語が広く用いられる。

ンバンディ語でハンセン病は *burma* や *ngiba* といい (Taber 1965<sup>2-21</sup>), この *ndiba* の, *ba* は刀, *ndi* は「尖っている」ないし「鋭い」の否定を意味し, 『尖った刀』ないし『鋭い刀』を感じ取れない』ことを表しているという (Bibeau 1981<sup>2-22</sup>)。また (グ) バヤ人の用いる (グ) バヤ語では *ngmbéré* という (Samarin 1966<sup>2-23</sup>)。

WHO の目標は 2005 年に達成されている。現在の様子はわからないが, ピグミーと呼ばれる人びとにおいてはハンセン病が高率だったようである (Baquillon et al 1992<sup>2-24</sup>)。アゴウドウ・マンガ (Agoudou-Manga) をはじめ, 各地に療養所があったというが, 詳しいことはわからない。

日本語の文献としては笹川 (2012)<sup>2-25</sup> がある。それによれば依然高率の州もあるらしい。また 5 つの療養所があったという。

### 3. カメルーン

およそ二百の部族が存在し, 北西部のカメルーン高地にはバミレケ人やバムン人やティカル人など, 中央部のアダマワ高原から北には, ブム人やドゥル人やバヤ人など, および西方や北方から来たフルベ (フラニ) 人やハウサ人やボルヌー人など, 南部の森林地帯にはベティ人 (エウォンド人やエトン人) やブルー人やファン人など, そして海岸沿いの森林地域にはバサ人やドゥアラ人などが生活を営む。そのほかカメルーン南部からガボンにかけての森林地帯, および東南部からコンゴ共和国北部にかけての森林地帯には, ピグミーとも総称される, それぞれバギエリとアカが, (今日では様相が変わっているかもしれないが, 少なくともかつては) 狩猟採集によって暮らしを立てている。公用語となっているフランス語や英語のほか, 部族によってそれぞれ固有の言語が用いられる。

ハンセン病の呼称については不明の点も多いが, ドゥアラ語で *mulongó* という (Helmlinger 1972<sup>2-31</sup>)。またヤウンデの北の地域で話されるエトン語では *zám* (van de Velde n.d.<sup>2-32</sup>), ファン語では *nžam* (Galley 1964<sup>2-33</sup>) というようであるが, この二つは同じものであろう。

WHO の目標は 1998 年に達成されている。ただし, やや古い調査だが, Louis et al (1991)<sup>2-34</sup> は, カメルーン, 中央アフリカ, コンゴ共和国, 赤道ギニア, ガボンで有病率を調べ, いずれの国でも公式の数値より高いことを見出している。

ディバンバ (Dibamba), ムバロマヨ (Mbalmayo), ンガウベラ (Ngaoubela), フーバルカ (Foubarka), サングメリマ (Sangmelima) などに療養所がある (ないし, あった) ようである。

### 4. 赤道ギニア

大陸部には, バントゥー系のファン人のほか, コンベ人やバレングエ人やブジェバ人など, ビオコ島には先住のブビ人 (Bubi) のほか, 大陸部から移住してきたファン人, 解放奴隷の子孫, ナイジェリアからの移民などが暮らす。公用語となっているスペイン語のほか, 大陸部ではファン語, またビオコ島ではブビ語が用いられる。

ハンセン病はブビ語で *ebatta* という (Boleki 2009<sup>2-41</sup>)。

ミコメセン (Mikomeseng) に療養所があり, 1946 年に入所者による大規模な抗議行動があったという。歴史学者の Brydan (2017)<sup>2-42</sup> は, 国際的に孤立したフランコ政権が, 同療養所を取り上げて, 事実とは裏腹に, 慈愛あふれる植民地統治を行っていることを宣伝したという非常に興味深い説を唱えている。

### 5. ガボン

住民の大多数はバントゥー系で, 北部には, 赤道ギニアやカメルーンにまたがってファン人, 南西部にはエシラ人やブヌ人, 南東部にはムベデ人やテケ人が暮らす。そのほか南東部の森林地帯には, ボンゴという, ピグミーと総称される人びとが住んでいる。公用語となっているフランス語のほかそれぞれの言語が用いられる。

ガボンにおけるハンセン病の現状については, Mondjo (2006)<sup>2-51</sup> を除き, 資料がきわめて乏しい。ハンセン病の病院ないし療養所といえば, シュバイツァーが 1913 年にランバレネの先に開設したそれが知られるが, そのほか北西部のエベイニユ

(Ebeigne) にも病院があるという。

#### 6. コンゴ共和国 (コンゴ・ブラザヴィル)

おおまかに言って、北部にはサンガ人とンボチ (ンボシ) 人、中央部にはテケ人、南部には、コンゴ民主共和国にまたがって、総人口の約半数を占めるコンゴ人が暮らす。そのほか北部には、カメルーンにまたがってピグミーと総称されるバカ、中央アフリカにまたがってアカないしムベンジェレが生活も営む。公用語となっているフランス語のほか、サンガ語やンボチ語やテケ語、またコンゴ語やリンガラ語といった言語が用いられる。

コンゴ共和国におけるハンセン病の状況については、資料が乏しい。政府の発表 (Ministère de la Santé et de la Population, République du Congo 2017<sup>2-61</sup>)、援助団体の発表 (Ordre de Malte France 2017<sup>2-62</sup>)、新聞記事 (Douniama 2018<sup>2-63</sup>) によれば、WHO の目標は 2003 年に達成されたが、コンゴ民主共和国および中央アフリカと接する北東部のリクアラ地方 (アカないしムベンジェレも住む) では新しく病者が見つかるようである。キンスウンディ (Kinsoundi) に病院がある。

なおムコンド (Moukondo) に療養所があった (ないし、今もある) という。

#### 7. コンゴ民主共和国 (コンゴ・キンシャサ)

二百以上の部族がいるといわれるが、比較的人数が多いのは、バントゥー系のルバ人、コンゴ人、モンゴ人である。そのほか北部には、ザンデ人などスーダン系やナイル系の人びとが暮らす。また、北部にはムブティやエフェ、東部・西部にはトゥワなど、ピグミーと総称される人びとが生活を営む。公用語となっているフランス語のほか、南西部ではコンゴ語、北西部ではリンガラ語、南部中央ではルバ語といった言語、そして東部ではスワヒリ語が用いられる。

ハンセン病は、コンゴ語で *wâzi*, *bwâzi* (Dereau 1957<sup>2-71</sup>)、リンガラ語で *mabanji* (Stapleton 1914<sup>2-72</sup>)、*maba* (Gbotokuma 2016<sup>2-73</sup>)、ルバ語で *nsudi*, *civwa* (*Dictionnaire Cilubà - Français*<sup>2-74</sup>) という。

また Laman (1936)<sup>2-75</sup> の大部な『コンゴ語-フランス語辞書』には、ハンセン病と症状の似た病気を含めると、上記の *bwâzi* のほか、*bwâsi*, *kwânda*, *kwaki*, *lúuba*, *lú-wa*, *lú-ya*, *lú-yá*, *nkusya*, *nkwangi*, *tòbosi* などさまざまな語が収載されている。

1930 年代の病者や療養所については、たとえば Kellersberger (1932)<sup>2-7-6</sup>, Muir (1939)<sup>2-7-7</sup>, Muir (1940)<sup>2-7-8</sup>, Dubois & van Hoof (1940)<sup>2-7-9</sup>, Degotte (1940)<sup>2-7-10</sup>, また 1950 年代のそれについては、特に療養所のリストや写真を収めた Kivits (1956)<sup>2-7-11</sup> が参考になろう。数々の療養所のうち、北東部、ムブティの活動範囲である「イトウリの森」のオイチャ (Oicha) にアメリカの宣教医師 C. K. Becker (1894-1990) が開設したそれについては Peterson (1967)<sup>2-7-12</sup> が参考になろう。

なおイヨンダ (Yonda) 療養所を舞台とした小説にグレアム・グリーン (Graham Greene) の *A Burnt-Out Case* (『燃え尽きた人間』) がある。

WHO の制圧基準は 2008 年に達成されている。ただし州によってばらつきがあるようである (Mputu Luengu-B 2008<sup>2-7-13</sup>)。ピグミーと呼ばれる人びとの間ではかつて有病率が高かったようである (Van Breuseghem 1938<sup>2-7-14</sup>, Degotte 1940) が、現在の様子については詳らかでない。

日本語の文献としては、笹川 (2005<sup>2-7-15</sup>, 2008a<sup>2-7-16</sup>, 2008b<sup>2-7-17</sup>, 2008c<sup>2-7-18</sup>, 2015<sup>2-7-19</sup>) がある。

#### 8. ルワンダ

人口のほとんどはフツ人とツチ人によって占められ、フランス語とルワンダ語が用いられる。ハンセン病はルワンダ語で *ibi-bēmbe* という (Cox et al<sup>2-8-1</sup>)。

Uwimana et al (2017)<sup>2-8-2</sup> によれば、ハンセン病の有病率は着実に低下しているという。

なおアカズ (*akazu*) という語がある。こんにちではハビヤリマナ元大統領の一族を中心とした一群の人びとを指すのに用いられるが、もともとはルワンダ語で「小屋」、とりわけ伝染病者が住み、同病者が亡くなったあとは焼き払われる、そういう小屋のことをいったらしい (Musabyimana 2008<sup>2-8-3</sup>)。そこから転じて、病者の一族のことを

指すようになったようである。Batsinduka (2009)<sup>2-8-4</sup>は、ハンセン病の血筋のある一族は *akazu* と呼ばれ、人びとは接触することを避けると記している。

## 9. ブルンジ

人口のほとんどはツツ人とツチ人によって占められ、フランス語とルンディ語が用いられる。

ハンセン病はルンディ語で *imi-bēmbe* という (Cox 1969<sup>2-9-1</sup>)。ニャンカンダ (Nyankanda) に療養所があったという。

## 10. アンゴラ

百以上の部族が存在するといわれるが、比較的人数の多いのは、中部から中西部にかけて暮らすオピンブドゥ人、北西部に暮らすムブドゥ人、そしてコンゴ民主共和国にまたがって北部に暮らすコンゴ人である。公用語となっているポルトガル語のほか、ウンブドゥ語やキンブドゥ語といった言語が用いられる。

そのキンブドゥ語でハンセン病は *kihuhu*, *kikunzu* という (*Dicionário Kimbundu – Português*<sup>2-10-1</sup>)。またハンセン病療養所を指すのに *gafaria*<sup>2-2</sup> という古いポルトガル語が用いられることもあったようである。

アンゴラにおけるハンセン病史について纏められた論考は見当たらない。断片的な種々の記述によれば、まずカナダ合同教会 (United Church of Canada) の宣教医師 W. S. Gilchrist が 1930 年代にビエ (Bie) のカムンドンゴ (Camundongo) に診療所を開設 (Gilchrist 1938<sup>2-10-2</sup>)。またドンディ宣教団 (Dondi Mission) が 1940 年にウアンボ (Huambo) に療養所を開き、第二次世界大戦後になって Gilchrist がその指揮をとったという。その後、政府が 1958 年にモシコ (Moxico) のカザンボ (Cazombo) に療養所を開設したという (CEML Hospital 2011<sup>2-10-3</sup>)。こうした 1950 年代のいくつかの療養所の写真は Leite et al (1958)<sup>2-10-4</sup> に収められている。ただしそれはポルトガルから独立する前のことであり、同療養所が行政組織上どのような位置にあったのか、よくわからない。またカトリックの考えの浸透したポルトガルの植民地に

あって、上記のプロテスタントの療養所がどのような立場にあったのか、それもよくわからない。さらにアンゴラ内戦 (1975-2002) のときに療養所や病者が武装集団 (キューバ軍を含む) からどのように扱われたか、それについても十分にわかっているわけではない。近年、歴史学的な研究がいくつかなされており (Byam 1997<sup>2-10-5</sup>, Heywood 2000<sup>2-10-6</sup>, Burlingham 2011<sup>2-10-7</sup>)、さらなる進展が期待される。

現在の状況については不明の点も多いが、笹川 (2004<sup>2-10-8</sup>, 2006<sup>2-10-9</sup>) によれば、ビエのカマクパ (Kamacupa) にハンセン病患者を診察する病院、首都ルアンダの郊外にフンダ (Fundu) という療養村があるという (それぞれ 2003 年、2006 年時点)。WHO の目標は 2005 年に達成されているが、Bule (2017)<sup>2-10-10</sup> によれば、現在も病者が見出されるらしい。

## 11. ザンビア

70 余りの部族がいるとされるが、比較的人数の多いのは、北東部のベンバ人、南東部のニャンジャ (チェワ) 人、南西部のトンガ人、西部のロジ人、そして北西部のルンダ人とカオンデ人である。英語のほか、それぞれの言語が用いられる。

ハンセン病は、ベンバ語で *fibashi* (*Free English-Bemba Dictionary*<sup>2-11-1</sup>)、*ifibashi* (Labrecque<sup>2-11-2</sup>) という。またロジ語では *mbingwa* というが、*newa-ya-bulozi*, *mulilo-wa-nyambe* という言い回しもあるらしい (*Silozhi-English Dictionary*<sup>2-11-3</sup>)。Griffiths (1965)<sup>2-11-4</sup> によれば、北西部のルアプラ溪谷に住む人びと (主にルンダ語を使用) のあいだでは、*tembwe* (ほぼ婉曲語で、同病の症状を広くカバーする)、*chibashi* (斑紋が一つのみ)、*mamombo* (皮膚の肥厚)、*mapumba* (結節)、*mavovela* や *matutulu* (皮疹)、*kaswandala* (斑紋のある病者)、*mamonbe* (斑紋が複数ある)、*mumba* (らい腫型結節で、最終的に手足の指が脱離し、大きな変形を来すことを含意) など、多様な語が用いられるらしい。これらが、こんにちのハンセン病と完全に一致するわけではないことは言うまでもない。さらにンデンプ人 (ルンダ語の

方言を使用) のあいだでは *mbumba* という語が用いられるが、白斑があり手や足の先が失われるものは *mbumba yaluzong'a* または *mbumba yachula* と呼ばれるという (Turner 1975<sup>2-11-5</sup>)。上述の *mblingwa*, *mumba*, *mbumba* は同系の語であろう。さらにトンガ語では *cinanta* (Harris 2016<sup>2-11-6</sup>)、レンジェ語では *manyansa* (Madan 1908<sup>2-11-7</sup>) という。イラ語では *chinsenda* というが、*mndilo wa Leza* という言い回しもあり、これは「神 (*Leza*) の火」という意だという (Smith & Dale 1920<sup>2-11-8</sup>)。探検家リビンストーン (1813-1873) の *Missionary travels and researches in South Africa*<sup>2-11-9</sup> に *sesenda* という語が出てくるが、この *chinsenda* に相当する語と考えられる。

ザンビアにおけるハンセン病史については、たとえば、Muir (1940)<sup>2-11-10</sup>、Griffiths (1965)<sup>2-11-4</sup>、そして Liwoyo (2011)<sup>2-11-11</sup>、Kapara et al (2012)<sup>2-11-12</sup> が参考になろう。大まかに言えば、ハンセン病対策は、19世紀後半からのいくつものキリスト教宣教団による活動 (たとえばロンドン宣教会 London Missionary Society は 1893 年、イエズス会は 1909 年、南アフリカ総合宣教団 South African General Mission は 1910 年に療養所などを開設) をもって始まり、1968 年までに三十余りの療養所が設置されたが、1995 年にハンセン病医療が一般医療に統合されるとともに、ほとんどの療養所は一般病院に転換されるに至ったということになる。その間、BELRA (British Empire Leprosy Relief Association) また LEPRRA (Leprosy Relief Association) から援助や助言を得た。たとえば、Seventh Day Adventists による療養所は BELRA の援助によって建てられている (Peach 1957<sup>2-11-13</sup>)。WHO の目標は 2007 年と 2008 年には達成できなかったものの、その後順調に有病率は低下している。現在の公衆衛生上の問題は結核と HIV / AIDS になっている。

なお Siamwiza (1998)<sup>2-11-14</sup> は、旱魃による犠牲者にハンセン病患者が比較的高率であったとしている。体の不自由を抱えていたためか、それとも縁者からの援助が得られなかったためか、判然としないが、ともかくも同患者はこうした災害にうま

く対処できないことは容易に理解されよう。

日本語の文献としては、笹川 (2009)<sup>2-11-15</sup>、姜 (2015)<sup>2-11-16</sup> がある。

## 12. マラウイ

中央部にはチェワ人、北部にはコンデ人やトゥンブカ人やトンガ人、そして南部には、ンゴニ人やヤオ人、ロンウェ人やニャンジャ人などが暮らす。公用語となっている英語とチェワ語のほか、それぞれの言語が用いられる。

ハンセン病は、チェワ語 (ニャンジャ語) で *khate* や *khonye* という (Paas 2004<sup>2-12-1</sup>)。

マラウイのハンセン病史については、Muir (1940)<sup>2-12-2</sup>、Molesworth (1968)<sup>2-12-3</sup>、Linden (1974)<sup>2-12-4</sup>、Iliffe (1985)<sup>2-12-5</sup>、Good (2004)<sup>2-12-6</sup>、Chingu et al (2013)<sup>2-12-7</sup> が参考になろう。Muir (1940) は 1939 年に 9 つある病者の施設のうち 6 つ (Seventh Day Adventist Mission による Malamulo, Universities' Mission to Central Africa による Likwenu, Marist Fathers による Utale, White Fathers による Mua, Church of Scotland Mission による Loudon, Seventh Day Adventist Mission による Mwami) を訪れ、それぞれの概要を描いている。また Iliffe (1985) は、1962 年の時点で、キリスト教宣教団がケアに与る療養所 (11 か所) に入院患者 1307 名、政府が 1956 年にコチリラ (Kochirira) に開設した療養所 (1 か所) に同 686 名がいたと整理している。あるいは Good (2004) は、UMCA (Universities' Mission to Central Africa) に焦点を合わせ、その活動をまとめている。1994 年に WHO の目標は達成され、その時あった 6 か所の療養所は、ウタレ (Utale) 療養所を除き、閉鎖されるに至っている。そしてウタレ療養所は現在、回復者の住む村となっている。同村の現況を知るには、スコットランドの援助団体 LUV+ (Leprosy at Utale Village PLUS) の Web サイト<sup>2-12-8</sup> が有益である。

日本語の文献としては笹川 (2011)<sup>2-12-9</sup> がある。

なお病者をケアしていた宣教師の Father Honoré はハンセン病に罹り、1950 年に亡くなったという (Linden 1974)。

### 13. モザンビーク

ザンベジ川から北にはマクア人とロムウェ人（両者は同系統なのでまとめてマクア＝ロムウェ人と呼ばれる）、その北にはマコンデ人、北西にはヤオ人、西にはニャンジャ人、そしてザンベジ川より南には、ジンバブエにまたがってシヨナ人に属するマニカ人 (Manyika) とンダウ人 (Ndau), その南にはツォンガ人、沿岸部にはチョピ人、トンガ人などが暮らす。公用語となっているポルトガル語のほか、マクア語やツォンガ語（シャンガーン語）やセナ語などそれぞれの言語が用いられる。

マクア語には方言がいくつかあるようで、辞書によれば、ハンセン病は、*maretta* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Emakhuwa Emarevonit*<sup>2-13-1</sup>), *makokho* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Emakhuwa Central*<sup>2-13-2</sup>), *makuttula* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Emakhuwa Emeetto*<sup>2-13-3</sup>), またロムウェ語で *mareca* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Elomwe*<sup>2-13-4</sup>), チュワボ *chuwabo* 語で *maranya* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Echwabu*<sup>2-13-5</sup>), マコンデ語で *malemba* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Shimakonde*<sup>2-13-6</sup>), ンダウ語で *mapere* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Cindau*<sup>2-13-7</sup>), ムワニ語で *magundula* (*Línguas de Moçambique: Vocabulário de Kiimwan*<sup>2-13-8</sup>) という。

さらにマクア語でハンセン病患者は *namareetha* (*mareetha* は同病) といい、「死にかけた人」という意味をもっているという (Deepak et al 2013<sup>2-13-9</sup>)。

アンゴラ同様、ハンセン病療養所を指すのに *gafaria* という古いポルトガル語が用いられることもあったようである。

ハンセン病史については不明の点も多いが、Zamparoni (2017)<sup>2-13-10</sup> は種々の資料をもとに、ポルトガル植民地期における、宣教教師の見方（たとえば、ビルハルトツ住血吸虫や象皮病などが一般的な疾患であったが、ハンセン病に対策の焦点を合わせた）や病者の隔離（たとえば南部マプト湾の小島に療養所を設けた）などについて触れている。また Palhota (2012)<sup>2-13-11</sup> は北部ナンブラ州のハンセン病患者の概要を素描している。病者の隔離は 1975 年、ポルトガルからの独立とともに廃

止になった。WHO の目標は 2007 年に達成されている。

日本語の文献としては、笹川 (2005<sup>2-13-12</sup>, 2010<sup>2-13-13</sup>) がある。

### 14. マダカスカルおよびインド洋の国々ないし島々

マダガスカルには、中央高地に住むメリナ人や、東沿岸部に住むベツイミサラカ人など、計 18 グループの人びとがいるとされる。マダガスカル人の祖先の一部は、インド洋を渡ってやってきたインドネシア系の人びととされ、マダガスカルのハンセン病の原因菌は、インドやインドネシアのそれと同じグループに属するという (Monot et al 2009<sup>2-14-1</sup>)。またマダガスカル語 (マラガシ語) はボルネオ島のバリト諸語のマアニヤン語 (Ma'anyan) に近いという。

現在マダガスカルでは、フランス語のほか、マダガスカル語、およびその様々な方言が用いられており、マダガスカル語でハンセン病は *habokana* という。ヘスペリアン財団の *Where There Is No Doctor* (邦訳版『医者のないところで』) のマダガスカル語版 *Rehefa Tsy Misy Dokotera*<sup>2-14-2</sup> でも同語が用いられている。また Jully (1901)<sup>2-14-3</sup> は、*habokanā*, *haboká*, *fatahený*, *fahaboká*, *hokaomá* など方言をいくつか挙げている。いっぽう *angama* という呼び名もあるらしい (Kent 1968<sup>2-14-4</sup>)。

WHO の目標は 2006 年に達成されているが、その後順調に低下しているというわけではないようである。

マダガスカルにおけるハンセン病史については、Advier (1936)<sup>2-14-5</sup>, Grimes (1950)<sup>2-14-6</sup> が参考になろう。マナンカバリー (Manankavaly) にロンドン宣教会 (London Missionary Society) による療養所 (Gow 1979<sup>2-14-7</sup>), アンボヒピアントラナ (Ambohipiantrana) などにノルウェー宣教会 (Norwegian Missionary Society) によるそれ (Sandmo 2011<sup>2-14-8</sup>), そしてマラナ (Marana) にイエズス会によるそれ (Bienheureux Pere Jean Beyzym SI<sup>2-14-9</sup>) があった (ないし、ある) という。

日本語の文献としては、笹川 (2004<sup>2-14-10</sup>, 2005<sup>2-14-11</sup>,



2007<sup>2-14-12</sup>)がある。

インド洋の国々ないし島々として、コモロ、モーリシャス、セーシェル、そしてフランスの海外県レユニオンがある。同地域のハンセン病は、Grainger (1980)<sup>2-14-13</sup>, Gaüzere & Aubry (2013a<sup>2-14-14</sup>, 2013b<sup>2-14-15</sup>)などに略述されている。フランス語圏のハンセン病の状況をまとめた *Bulletin de l'ALLF* の資料によれば、マヨットにて患者の発見が続いているようである。レユニオンには聖ベルナル (Saint-Bernard) 療養所があった (ないし、ある) という。

アフリカという範疇からは外れるが、かつてディエゴガルシア島にはハンセン病者が送られたという。

### 15. ジンバブエ

東部には、モザンビークにまたがって総人口の多くを占めるショナ人、また、おおまかに言って西部には、南アフリカのズールー人に由来するヌデベレ (ンデベレ) 人が暮らす。公用語となっている英語のほか、ショナ語やヌデベレ語が用いられる。

ショナ語でハンセン病は *maperembudzi* という (Shoko 2007<sup>2-15-1</sup>, Mavhunga 2014<sup>2-15-2</sup>)。

ハンセン病史については、Moiser (1938)<sup>2-15-3</sup>, Muir (1940)<sup>2-15-4</sup>, Aquina (1969)<sup>2-15-5</sup>, Rittey (1972)<sup>2-15-6</sup>, Lyons & Ellis (1983)<sup>2-15-7</sup>, Zvobgo (1986)<sup>2-15-8</sup>, Warndorff & Warndorff (1990)<sup>2-15-9</sup>, Mazarire (2007)<sup>2-15-10</sup>, Mazarire (2009)<sup>2-15-11</sup>, Zvobgo (2009)<sup>2-15-12</sup> が参考になろう。略記すると以下ようになる。すなわち、19世紀末からオランダ改革派教会、アメリカ会衆派教会、アメリカ・メソジスト・エピスコパル教会、スウェーデン教会の宣教団が小規模な診療所ないし療養所を開設。それらは1927年に政府に移管され、ンゴマフル (Ngomahuru<sup>\*2-3</sup>) 療養所が誕生。その時点で政府はムテムア (Mtemwa) 療養所を設けていたが、同療養所の閉鎖に伴い、入所者は1962年までにンゴマフル療養所に転所。ムテムア療養所は、ハンセン病治療を終えたが、他国から来て母国に戻れない人を含め、諸々の事情で帰る場所のない人たちの療養村となる。1974

年に病者収容法が廃止され、ンゴマフル療養所は結核療養所となる。ムテムア療養所入所者の懐古談 (Rittey 1972) によれば、同入所者は、治療を受けるかたわら、雑役係として他の病者の包帯巻きを行い、また教師役を務めたようである。

なお、モザンビーク内戦の際に、ハンセン病者の多いモザンビークから多くの難民が流れ込んだ。そのためジンバブエで新しく見出される病者における同難民の割合は増大したという (Wittenhorst et al 1998<sup>2-15-13</sup>)。

### 16. ボツワナ

総人口の大部分をツワナ人が占め、そのほかジンバウエにまたがってショナ人の一部であるランガ人、またカラハリ砂漠にはサンが住む。ツワナ語のほか、英語が用いられる。

ツワナ語 (Setswana) でハンセン病ないしその症状は *ngara* あるいは *lepero* というようである (Kumaresan & Maganu 1994a<sup>2-16-1</sup>)。

ハンセン病史について纏められた論考は見当たらないが、1930年代の様相については Dyke (1934)<sup>2-16-2</sup> が参考になろう。

### 17. ナミビア

北中央部には、総人口の約半分を占めるオバンボ人、北東部にはカバンゴ人やヘレロ人やサン人、カプリビ地方にはロジ人、北西部にはヒンバ人やダマラ人、南部にはナマ人が暮らす。また、アフリカーナーと呼ばれる白人、そしてレホボス・バスターと呼ばれる混血の人びとも住んでいる。英語 (公用語) とアフリカーンス語とドイツ語のほか、各部族においてそれぞれの言語が用いられる。

現地語におけるハンセン病の呼称については Namibia Biodiversity Database<sup>2-17-1</sup> の一覧表が便利である。これまで述べてきたことと重複するが、その一部を引用すると、①オワンボ語のなかのンドンガ語では *oshilundu*、クワニャマ語では *etakaia* ないし *etakaja*、②ヘレロ語では *omutjise wongana*、③カバンゴ地方で話されている諸語のうち、ルカンガリ語では *yingondwe* や *yihuru*、④カプリビ地方で話されている諸語のうち、ロジ語

では *mbingwa* や *mulilo-wa-nyambe* や *newa-yabulozi*, ⑤ツワナ語では *lepero*, ⑥アフリカーンス語では *melaatsheid* や *lasarus* や *lepra*, ⑦コイコイ語のなかのナマ語では *!omamás* や *!omamásib* (!は歯茎吸着音を表す) というようである。

ナミビアにおけるハンセン病患者に関する記述は少ない。Lebzelter (1934)<sup>2-17-2</sup> は、同病者はヨーロッパ人の目に入らないように隠される, Koeb (1955)<sup>2-17-3</sup> は最北部のクアニヤマ・アンボ人において同病者を見かけたことがないと記している。カバンゴ地方やカプリビ地方では多かったようで、今日も少数ながら同地方で新しく病者が見つかる。またフィンランド人宣教医師(ルター派)の Selma Rainio が 20 世紀前半にオバンボランド(Ovamboland)のオンドンガ(Ondonga)にオナンジョクウェ(Onandjokwe)病院を建て、マラリアや性病、インフルエンザやハンセン病や外傷の診療を行ったという(Nord 2014<sup>2-17-4</sup>)。

東カバンゴ州のマシャレ(Mashare)に療養所があったが、1980年代——独立戦争(1966-1990)のとき——に閉鎖されたという。現在も同地に障害を抱えた者たちが集まって住む一画がある。

#### 18. 南アフリカ・スワジランド・レソト

南アフリカの東部にはズールー人, 南東部にはコーサ人, 北東部にはモザンビークにまたがってツォンガ人, ジンバブエにまたがってベンダ人, 東部内陸部にはソト人, また北部中央には, ボツワナにまたがってツワナ人などが暮らす。そのほか, アフリカーナー, イギリス系白人, そしてイギリス植民地時代に労働者として連れてこられたインド人らの子孫も暮らす。英語, アフリカーンス語のほか, ズールー語, コーサ語(ホーサ語), 北ソト語とソト語(南ソト語), ツワナ語など, 各部族の言語が用いられる。

南アフリカに囲まれた小国としてスワジランドとレソトがある。前者はスワジ人が大多数を占め, 英語とスワジ語(Siswati)が公用語となっている。後者はソト人が大部分を占め, 英語とソト語(南ソト語)が公用語となっている。

南アフリカで用いられているハンセン病の呼称

については, Health Terminology (Multilingual South Africa). pdf<sup>2-18-1</sup>の一覧表が便利である。それによれば, アフリカーンス語で *melaatsheid* (アフリカーンス語はオランダ語に由来しており, *melaatsheid* はもともとオランダ語である), ズールー語で *ubulepheru*, コーサ語で *iqhenqa*, *isilepere*, スワジ語で *bulephelo*, インデベレ語(Isindebele)で *inafu*, *ubulepheru*, ツワナ語で *lepera*, ペディ語(Sepedi)で *lephera*, ソト語で *lepera*, ベンダ語(Tshivenda)で *mapele*, ツォンガ語(Xitsonga)で *nhlokonho* というようである。また, ズールー語で *u(lu)-badeka*, *u(lu)-coko* (Bryant 1905<sup>2-18-2</sup>), *ubhadeka*, *uchoko* (Illman 2014<sup>2-18-3</sup>), スワジ語で *mdilikana* (McCoy 2015<sup>2-18-4</sup>), ツォンガ語で *nhlokonho*, *nhlulabadahi* (Junod 1913<sup>2-18-5</sup>, 後者は医師より強い病気という意だという)ともいうらしい。コーサ語には婉曲表現として *umlamb'*, *omkhulu* という言い回し(文字通りには *great rash* の意だという;*khulu* は大きい)の意)があるという(Kirsh et al 1996<sup>2-18-6</sup>)。これらの語には, 英語やドイツ語やポルトガル語などからの借用語と考えられるものが混じっている。

南アフリカ, スワジランド, レソトのハンセン病に触れた論考として, Schulz & Pentz (1970)<sup>2-18-7</sup>, Scott (1977)<sup>2-18-8</sup>, Van Zijl (1989)<sup>2-18-9</sup> がある。南アフリカは, 成立に至るまでに, ボーア諸共和国の建国(19世紀半ば)や南アフリカ連邦の成立(1910年)といったように, やや複雑な変遷を経ており, ハンセン病患者対策もまとめるのが困難であるが, あえて大まかにまとめると以下になる(諸文献で療養所の開設年に僅かな違いがある)。すなわち, 1817年に病者の療養所が Hemel en Aarde(「天と地」)に開設され(それ以前にも, 病者を収容する家は幾つかあったようである), モラヴィア兄弟団の宣教師による宣教およびケアが行われるようになった(Trobe 1894<sup>2-18-10</sup>, Theal 1908<sup>2-18-11</sup>)。同療養所は1846年に閉鎖され, 病者は1845年から, ケープタウン沖合のロベン島に開設された療養所に移された(ロベン島のそれは1931年に閉鎖され, 病者は再度後述するウエストフォートに移された)。1884年に Cape of Good

Hope で Leprosy Repression Act が成立（施行は 1891 年）。他の共和国でも同様のハンセン病法が成立。1914 年に連邦ハンセン病法成立（1977 年に廃止）。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ムジャンヤナ療養所ないしエムジャンヤナ療養所（Mjanyana ないし Emjanyana; 1897 年開設）、ウエストフォート療養所（Westfort; 1898 年に開設、当初の名称は Pretoria Leper Asylum）、アマチクル療養所（Amatikulu; 1902 年開設）、ボシャベロ療養所（Botshabelo; 1914 年開設）、ボーフム（Bochum; ルター派のベルリン宣教会の宣教師夫妻が 1914 年に開設）、ムカンバチ療養所（Mkambati; 1920 年開設）など、各地で療養所が開設される。スワジランドにはナザレン教会がケアに与るムブルジ療養所（Mbeluzi）があった（1948-1982）。20 世紀初頭の療養所の様子については、Macvicar (1928)<sup>2-18-12</sup>、Jamison (1934)<sup>2-18-13</sup>、Strachan (1934)<sup>2-18-14</sup>、Germond (1936)<sup>2-18-15</sup>、Muir (1940a)<sup>2-18-16</sup>、Muir (1940b)<sup>2-18-17</sup>、Winter (1950)<sup>2-18-18</sup> が参考になろう。ロベン島に関しては、赴いた医師による報告（Impey 1895<sup>2-18-19</sup>）や宣教師（プリマス・ブレザレン会）による記録（Fish 1924<sup>2-18-20</sup>、Fish 1934<sup>2-18-21</sup>）も公開されている。この間、ロベン島では 1892 年に患者による抵抗運動があったという。またボシャベロ療養所では開設 4 カ月後に患者による暴動があったという（Germond 1936）。強制隔離は 1977 年、イギリスからの独立とともに廃止になった。

近年、歴史学的な研究が公開されている。Deacon (1994<sup>2-18-22</sup>、1996a<sup>2-18-23</sup>、1996b<sup>2-18-24</sup>) はロベン島また隔離について、Horwitz (2006)<sup>2-18-25</sup> はウエストフォート療養所について、Kistner (1998)<sup>2-18-26</sup> は隔離について追究している。

日本語の文献としては、笹川 (2005a<sup>2-18-27</sup>、2005b<sup>2-18-28</sup>) がある。

以上、中部・南部アフリカにおけるハンセン病の呼称ならびに同病患者および療養所について略述してきたが、現在の患者らの生活状況が十分明らかになっているとは言い難く、それを明らかにする基礎的調査が為されるべきと考えられた。

本稿は本来「ハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究」について概観するものであるが、ここで、国レベルでは WHO の目標が達成されたとはいえ、中部・南部アフリカにおけるハンセン病の発見・治療に関して特に留意すべきことを四点述べておきたいと思う。そのうちの三つは、WHO Regional Office for Africa (*Progress towards the reduction of the burden of leprosy: leprosy is curable*) が、特に注意を払うべき人びと、ないし調査の困難な地域として挙げたことと重なる。すなわち、一つ目は、移動しながらの狩猟や採集で生計をたててきたピグミーと総称される人びとに対する対策である。定住化が進んでいるとはいえ、病者を見出し、定期的な治療を行うのはやはり困難を伴うであろう。二つ目は、内戦や紛争によって避難してきた病者や障害を抱えた人びとに対する援助である。彼らが、母国はもとより、当座の受け入れ国から手を差し伸べられることは少ないであろう。三つ目は、早魃などに見舞われた地域に住む、病者や障害を抱えた人びとに対する援助である。彼らは食料の入手が困難で、子どもらと同様真っ先に命を落とすことが多いだろう。そして、第四点目、WHO が挙げなかったことであるが、コロニーと呼ばれる一画で暮らす人びとに対する援助である。そうしたコロニーは、かつては町から離れたところに作られていたとしても、町の拡大ともなって開発の対象地域となり、立ち退きを迫られている者もいよう。

### Ⅲ. 中部・南部アフリカのハンセン病患者の文化的・社会的環境

#### 1. ハンセン病の病因論ならびに伝統的治療

本節では中部・南部アフリカのハンセン病患者がどのような文化的・社会的環境に置かれてきたか、それを見ていくことにする。当然ながら、患者の心理社会面はそれらから大きな影響を受けてきていると推察されよう。主に文化人類学者や歴史家による調査や研究を概観するが、医師や宣教師などの手によるものも含めることにする。

まず、ハンセン病、および皮疹や斑紋（ハンセ

ン病とは限らない)の原因はどのようなものと考えられてきたか、それについて概観する。

最初に食物について略述する。報告や記述には地域的偏りがあり、ザンビアにおけるものが多くなっている。たとえば、カオンデ人のなかには皮膚疹を恐れて、アンテローブを食べない者がいる、またハンセン病を患った者は、豚やカバ、シマウマやナマズを食べないという (Melland 1923<sup>3-11</sup>)。あるいはベンバ人は、ブッシュバックの肉を食べると、斑紋のある子どもが生まれると考え、妊娠はそれを食べないという (Richards 1939<sup>3-12</sup>)。また、ハンセン病に罹り、治った者は、ブッシュバック (*Chisongo*) の肉を食べると同病が再発すると考え、それを食べないという (Moore 1940<sup>3-13</sup>; *Biodiversité au Katanga*<sup>3-14</sup>)。同様に、ベンバ人やランバ人でハンセン病の治った者は、シマウマの肉を食べると同病が再発すると考え、それを食べないという (*Biodiversité au Katanga*<sup>3-14</sup>)。それ以外にも、斑点のあるバーベル (*barbel*; ナマズの一種と推察される)、シマウマ、ホロホロチョウを食べることは避けられるという (Moore 1940<sup>3-13</sup>)。同様の考え方をする部族ないし民族はほかにもあるらしく、ンデブ人ないしルンダ人は、縦縞や斑点のある獣や鳥 (シマウマ、ブッシュバック、ブルー・ダイカー、サーバル、ジェネット、ある種のマンガース、縞ネズミ、ホロホロチョウ、縞の入ったカワセミ、頭部に斑点のある鳴き鳥) を食べると、同病になると考え、それを食べないという。またハンセン病ではないが、赤い模様のある鳥や魚を食べると、出血が止まらなくなると考えているという (Turner 1953<sup>3-15</sup>; Turner 1967<sup>3-16</sup>; Turner 1975<sup>2-11-5</sup>)。あるいは北西部のルアブラ渓谷に住む人びとはカバを食べるとハンセン病に罹ると考え、それを食べないという。またホロホロチョウ、ブッシュバック、バブルフィッシュ、そして赤色の、もしくは鱗のない魚 (ナマズ) を食べるとハンセン病が悪化する、さらには総じて赤いものを食べると紅斑が悪化するとされているという (Griffiths 1965<sup>2-11-4</sup>)。東部のヴァリ・ビサの狩猟民も同病に罹ることを恐れ、縦縞や白い斑紋のある哺乳類を食べないという (Marks 1976<sup>3-17</sup>)。南部のイラ語を話す人び

との場合、イランドやシマウマの肉を食べると肉が脱落すると考え、ハンセン病者はそれを食べないという (Smith & Dale 1920<sup>2-11-8</sup>)。アンボ人 (*Ambo*) のあいだでは、チーフはシマウマやブッシュバックの肉を食べてはならないとされているという。それらの斑点や縞模様はハンセン病者の斑紋、またその足 (蹄) は同病者の手足に似ており、食べて同病に罹ることを恐れるためだという (Stefaniszyn 1964<sup>3-1-8</sup>)。

ザンビア以外では、たとえば南スーダンのザンデ人はブッシュバック (*bongo*) の肉を食べると同病に罹ると考えているという (Muir 1940b<sup>3-1-9</sup>)。チャドのフラニ人はヤギの肉を食べないという (Missionary Atlas Project Africa Republic of Chad; <http://worldmap.org/maps/other/profiles/chad/Chad%20Profile.pdf><sup>3-1-10</sup>)。その理由は不明だが、斑紋があるためかもしれない。あるいはコンゴ民主共和国のルバ人は、シマウマの肉を食べるとハンセン病に罹ると考え、それを食べないが、それは、シマウマの足が、足首を失ったハンセン病者の足に似ているからだという (*Biodiversité au Katanga*<sup>3-1-4</sup>)。あるいはタンザニア南部からモザンビークにかけて暮らすコンデ人 (*Konde*) は、イランドやブッシュバックの肉を食べると同病に罹ると考えているという (Mackenzie 1925<sup>3-1-11</sup>)。さらにマラウイのヤオ人は、象、カバ、サイの肉はハンセン病を起こすと考え、食べないという (Hearsey 1909<sup>3-1-12</sup>)。ボツワナ北西部では、キリンの皮やバーベル (魚) を食べるとハンセン病 (*nagara*) に罹るとされているという (Kumaresan & Maganu 1994a<sup>2-16-1</sup>)。

そのほか、地域は記されていないが、アフリカ各地を回った Muir (1940b) は、斑点のある木の影にあたると、特定の川で魚取りをすると、あるいは地域の神を貶めると同病になると考えられているとしている。

以上の多くの報告や記述から、斑紋の皮や棒状の足といったハンセン病の特徴を持つ動物の肉の摂食が避けられていると纏めることができよう。前稿 (若林 2016, 若林 2017) で述べたように、東部アフリカおよび西部アフリカではヤギやある

種の魚の摂食が避けられていたが、中部・南部アフリカの幾つかの地域でも避けられているようであり、これらとハンセン病の関連付けは広範囲に及んでいるものと推察される<sup>\*3-1)</sup>。

なお食べ物ではないが、ンデンプ人の社会では、儀礼に臨む少年は聖なる火の炎の縦縞模様を見ると、ハンセン病の縞模様が体に表れると考え、それを見てはならないとされているという (Turner 1967)。儀礼の秘密を守るために、ないしは社会で禁じられていることを厳守させるために、ハンセン病が持ち出されているといえよう。

そのほかの病因論としては、1940年代にモザンビーク南部で調べられたものがある (Silva 1943<sup>3-13</sup>; また Zamoaroni 2017<sup>3-14</sup>)。それによれば、ハンセン病は、神がもたらす、他人の呪詛によって生じる、湖の魚を食べると生じる、腹に虫がおり、それによって結節や潰瘍などが生じる、などと考えられているという。

次に伝統的な治療について触れた報告を概観する。中部・南部アフリカにおいて薬草を用いた治療<sup>\*3-2)</sup>は盛んである。ルアブラ溪谷に住む人びとの場合、異状に気付いた者は伝統的薬草師 (shinganga) のもとを訪れるが、薬草師は豊富な知識を持っているという (Griffiths 1965)。また Rittey (1972)<sup>2-15-6</sup>は南ローデシア (現ジンバブエ) のある病者が伝統的薬草師 (nganga) のもとを訪れたことを記している。

呪術による治療も盛んなようで、Scott (2000)<sup>3-1-15</sup>は南アフリカ共和国の病者が呪術師 (sangoma) のもとを訪れることを記している。しかし呪術的治療にてどのようなことが行われるか、断片的な記述はあるものの、詳しい観察報告はないようである。術師は手法を第三者に見せないためであろう。

以上、かつて多くの食物規定や伝統的治療があったが、それらはこんにちどのように変化しているか、詳らかではない。また何か変化しているとして、なぜそうした変化が生じたのか、詳らかではない、あるいはこうした食物規定にもかかわらずそれがどのくらい実際に守られていたか、逆に言えば、当該食物がどのくらい摂られていたか、

それも詳らかではない。調べる必要があるであろう。

## 2. 病者の隔離

病者の隔離に関する報告もいくつかある。たとえばザンビアのヴァリ・ビサの狩猟民の場合、病気が進行し、誰からもそれとわかるようになると、病者は森 (ブッシュ) の中に建てられた小屋に移り、ほかの村人と食事を共にすることが禁じられるという (Marks 1976<sup>3-17</sup>)。ルアブラ溪谷に住む人びとの場合、村からかなり離れたところに小屋が建てられ、病者はそこに住まわされるが、未婚の、または夫を亡くした女性が小屋にいたる途中まで食事を運ぶという。その際、後ろ向きで近づき、小屋も病者も見えてはならないとされているという。また病者は、餓死することが多く、殺害されることはないという。もし病者を殺害すると、その殺害者が同病に罹るとされているからだという。しかし、この隔離慣行も、キリスト教宣教団と政府によるハンセン病対策が行われるようになった、1915年から1920年にかけて廃れたという (Griffiths 1965<sup>2-11-4</sup>)。アンボ人の場合、病が進行すると、村から追放され、森の中の、村から少し離れた場所に住まわされるという (Stefaniszyn 1964<sup>3-1-8</sup>)。

マラウイでも病者は森に住まわされ、食事が運ばれるという (Hearsey 1909<sup>3-1-12</sup>)。モザンビークの南部では、荒野 (wild) に病者の小屋が建てられ、その入り口の前に容器が置かれ、毎日食事が届けられるという (Silva 1975<sup>3-1-13</sup>)。一方、ツオンガ人の間では、ハンセン病は非常に恐れられるが、同病者は隔離されないという。ただし同病者は他の人が食べたあとで食べなければならない、「ビール祭」に参加できるが、自身のカップを持参しなければならない (他の者は村長からカップを受け取る) とされているという (Junod 1912<sup>3-2-1</sup>)。

このような隔離慣行が現在どうなっているか、調べる必要がある。またもし変化があったならば、それはどうしてなのか調べる必要がある。

### 3. 病者の葬り

ハンセン病者の葬りに関しても報告がいくつかある。たとえばザンビアのヴァリ・ピサの狩猟民は同病者の亡骸を埋葬せず、寝床に包み、木の中に置き、朽ちるに任せるという (Marks 1976<sup>3-7</sup>)。ベンバ人も亡骸を埋葬せず、地面の上に置き、葉や石で覆うのみだという (Labrecque<sup>2-11-2</sup>)。北西部のルアブラ溪谷に住む人びと (主にルンダ語を用いる) も埋葬せず、大きい樹皮で包み、洞穴や穴に投げ入れるか、樹洞に収めるかしたという (Griffiths 1965<sup>2-11-4</sup>)。

アンボ人の場合、死期が間近になると、1マイル (約 1600m) ほど離れた小屋に運び、息を引き取ると戸口を閉め、亡骸を朽ちるに任せたという。またもし病者が村の近くで息を引き取ったならば、木の上に置き、鳥が食べるに任せるという。病者の亡骸を埋めないのは、もし埋めた場合、同病が母系親族に再び生じると考えられているためだという (Stefaniszyn 1964<sup>3-18</sup>)。

マラウイでも埋葬しないという (Hearsey 1909<sup>3-12</sup>)。リウォンデ (Liwonde) には、病者の亡骸を、その洞うらに入れたとされるバオバブ<sup>\*3-3)</sup>の木 (Leper tree と呼ばれる) が残っている。

またジンバブエのショナ人は、森を、悪霊や病の領域、またハンセン病のような危ない病に罹った人が追いやられる場所、その中で死に果てるに任せられる場所と見なしたという (Mavhunga 2014<sup>2-15-2</sup>)。

あるいはトンガ人は、通常は亡骸を屋敷 (homestead) 内に埋葬するが、ハンセン病者、そして奇形を持って生まれた子どもや、自殺者については森に投棄したという (Colson 2006<sup>3-31</sup>)。Colson はさらに 1951 年にある同病者が亡くなったとき、弔われることなく、その亡骸と所有物がツチブタ (オオアリクイ) の巣穴に捨てられたことを記している。

さらにツォンガ人の場合、小屋で病者が亡くなった場合、その亡骸を小屋の中に埋め、その小屋を潰して、用いないという (Junod 1912)。

以上、埋葬しないという葬り方が広く分布していることがわかる。アフリカの多くの地域では、

死者は、適切に埋葬されたのち祖先界に入るといふ考え方があるらしいが、病者の亡骸を埋葬しないというのは、病者を祖先界の仲間に入れれないということと同義であろう。このような葬り方が、こんにちどのようになっているか、調べる必要がある。またそうした葬り方に変化があったとすれば、それはどうしてなのか調べる必要がある。

### 4. ハンセン病者に関することわざや民話

前稿 (若林 2017<sup>1-4</sup>) で、西部アフリカにおけるハンセン病者に関することわざや民話についていくつか触れたが、中部アフリカ (カメルーンを除く) また南部アフリカにおいては二つの民話しか見出せなかった。以下にその粗筋を紹介するが、登場人物が *lépreux* (現地語からフランス語に訳された民話の場合) あるいは *leper* (英語に訳された民話の場合) であると説明されていても、もしくは *lèpre* (フランス語訳の場合) あるいは *leprosy* (英訳の場合) を患っているとされていても、それはこんにちの医学におけるハンセン病者もしくはハンセン病と完全に一致するわけではないので、注意してほしい。

さて、その一つは、コンゴ民主共和国のイトゥリの森で農耕を営むレセ (Lese) 人が灼の周りで語る民話で、「ある男が罌を仕掛けに森に入った。すると病気を患う女の森の精霊と出会った。その精霊は、自分の傷口の血と膿をなめたら、行ってもいいと言った。男は言われるままにしたが、それでも女は刀に変身し、男を突き刺した」(Grinker 1994<sup>3-41</sup>) というものである。「森は危険である」「血と膿をなめる」「変身する」「女の精霊が男の人間を殺す」など、いくつかのモチーフが織り込まれているが、十分な考察は行なわれていないようである。

もう一つはアンゴラのムブンドゥ (Mbundu) 人の民話で、「兄と妹のきょうだいが両親を亡くし、朝食にナマズ (bagre) を食べて暮らしていた。兄は総督 (Governor) の娘と出会い、二人は教会に行き結婚した。妹はその兄嫁から奴隷として扱われるようになった。妹は森に逃げ出し、そこで病気を患ったため森に住まわされた祖母と出

会った。妹は祖母の看病をし、祖母から多くの富をもらった。兄は総督の娘に惑わされたことに気づき、同娘と別れ、きょうだいと一緒に暮らした」(Chatelain 1894<sup>342</sup>) というものである。教会や総督といった語が登場することからそれほど古い民話とは考えにくい、「病者は森で暮らす」「病者から富を受けとる」といったことが織り込まれていることから、ここに記しておく。

なお、前稿で十分に紹介することができなかったので、ここで西部アフリカにおける民話についても記しておく。一つ目はナイジェリア北部のハウサ人の民話で、「男の盲人と女の病者が結婚し、子どもを百人設けた。敵が攻めてきたので、5人の子を連れて逃げ、男はカバ、女は鱈に変身して敵を追い払った。敵がまた攻めてきたので、神の名のもと王と約束(『王はこの95人の子をまもる』)をした。王は自身の子の命を諦め、盲人と病者の子全員の命を救った。すなわち約束を果たした。敵が去り、何年も経って、王は、成長した子の一人と結婚したが、同女は体からコヤスガイをたくさん生み出した。王は敵軍に全財産を奪われたが、このコヤスガイのお陰で、一家は以前よりも栄えた」(Tremearne 1913<sup>343</sup>) というものである。「病者と結婚する」「変身する」「約束を果たす」「病者の子は富を生み出す」といったことがモチーフとなっている。

二つ目はセネガルのウォロフ人の民話で、「巨人がバオバブの悪魔と戦い、その悪魔をバオバブの木に押し付けた。木は引き抜かれて空中を飛び、通りかかった、赤ん坊を背負った女の、その赤ん坊の目の中に入った。怒った母親は巨人(とその友人)を追いかけた。巨人らはそこにいた羊飼いの病者の衣の内側に隠れた。母親が立ち去り、同病者が衣を緩めたとき、巨人たちの姿はなかった。病者の虱 *poux*<sup>344</sup> に食べられたのであった」(Guillot 1933<sup>344</sup>) というものである。「病者の虱に食べられる」がモチーフとなっている。

三つ目は、西部アフリカ(地域名や民族名は記されていない)の民話で、「ある病者が絶望して、野獣に食われようと森(ブッシュ)に入った。そうしたら野獣ではなく火鳥(*fire-bird*)と出会った。

火鳥は病を治してあげるが、その代わりに、自分の巣がある木そして卵を守ってほしいと条件を出した。病者がこれに同意すると、失った指と足先が生えてきて、病者は裕福になった。しばらくして巣から卵が四つ落ちた。病者は一つを食べ、一つを飲み、一つを妻に与え、もう一つは飼っていた猫が舐めた。戻ってきた火鳥は卵がすべて無くなっていることに気づき、この病者もほかの人間と同じだという結論に達した。そしてほかの絶望した人を救うために飛び去っていった」(Guillot 1965<sup>345</sup>) というものである。「幸福になると惨めな時期を忘れる」といったことがモチーフといえようか。

四つ目はマリのバンバラ人の民話で、「王様が、チーズの木(実際には言えないが、バオバブの木のことかもしれない)の上に置かれた金の入った甕と銀の入った甕を下ろせた者に娘を嫁がすと宣言した。ある若者がこれに挑むため王のもとに向かう途中で老婆に会った。老婆は力を貸してあげるが、その代わり、彼をハンセン病者の姿にするという条件を出した。病者姿となった若者は課題に成功し、娘を連れて帰った。娘は病者姿の若者を嫌った。先の老婆に、もとの姿に戻してもらい、若者はハンサムな男、娘は男の本当の妻になった」(Görög & Diarra 1979<sup>346</sup>) というものである。「病者と結婚する」「変身する」といったことがモチーフであろうか。

アフリカにおけることわざや民話は、すでに19世紀の終わりごろから多くが収集され、英語やフランス語で公刊されている。そのなかにハンセン病者が登場するものも少なくはないように思われるが、ほとんどが紛れているようである。探索と考察が望まれよう。

#### IV. 中部・南部アフリカのハンセン病者および同治癒者を対象とした調査や研究

##### 1. 精神症状・精神的健康

ここから本稿の本題に入っていくが、実は病者の心理面を扱った論文はきわめて少ない。

その数少ない論文の一つが Scott (2000)<sup>31-17</sup> の

それである。Scott は南アフリカの黒人病者 30 名に半構造化面接を行い、診断直後の気持ち、伝統医療の受診経験、西洋医学的治療に対する満足度、配偶者や家族との関係、職業上の問題を尋ね、診断直後の気持ちとしては、悲痛ないし悲観、恐怖、当惑が最多であること、11 名 (37%) が自殺を考えたこと、受けた医療におおむね満足していること、配偶者のいた 23 名のうち 16 名が病気が原因で配偶者と別れたこと、家族からも排斥されたこと、全員が仕事を失うことを恐れ、17 名が雇い主に病気のことを伝えていないことなど、その心理面を、素朴だが、ストレートに素描した。

いっぽう、Chingu et al (2013)<sup>41</sup> はマラウイのウタレ病者村 (Utale leprosy village) に住む病者 100 名と地域に戻った病者 98 名の QOL (生活の質) を、チェワ語版 WHOQOL-BREF を用いて比較し、病者村に住む女性の心理領域の QOL は、同じく病者村に住む男性のそれより、また地域に戻った女性病者のそれより悪いことを示し、病者村の女性は、家事や家族の世話といった役割を無くしていることが背景にあるのではないかと推測した。ただし、地域居住者と病者村居住者の人口学的プロフィールは異なっており (たとえば、配偶者のいる者の割合はそれぞれ 65.3% と 46.0%、雇用されている者の割合は 91.8% と 82.0%、家族や親戚との付き合いのある者の割合は 77.6% と 42.0%)、そうしたことを加味したうえでの分析が必要であろう。

なお、病者村に住み続けている者も、地域に戻った者も、種々の事柄を勘案して、そのほうが相対的にマシな生活を送れると考えているからこそそうしているのであり、単純に両者を比較すればよいというわけではない。さまざまな要因を踏まえての QOL の比較が望まれよう。

南アフリカでは、Deacon が追究しているように、白人と非白人が分けられたのみならず、ハンセン病者と非ハンセン病者、さらには精神病患者と非精神病患者も分けられてきた。こうした背景を踏まえ、二重三重に分けられた人びとの心理面をさぐる研究が望まれよう。

## 2. 知識・態度・行動・社会とのかかわり

この領域の研究としては、上述した宣教師や文化人類学者などによるもの以外には見当たらなかった。基礎的な調査が必要であろう。

## 3. 受診と治療

受診に関しては、Schäfer (1998)<sup>43-1</sup> による調査がある。彼はチャドで 1992 年から 1996 年にかけてハンセン病患者に提供された医療を調べ、女性は男性より治療が遅れるわけではないこと、女性の障害率は男性より低く、治療完遂率は男性よりやや高いこと、男性より自助グループに参加していることを見出し、女性のほうが診断や治療やフォローアップという点で不利だとは言えないと結論した。

また潰瘍などに対するセルフケア・グループの効果に関しては、Deepak et al (2013)<sup>43-2</sup> によるモザンビークでの調査がある。それによれば、セルフケア・グループは潰瘍や障害などへのケアの向上のみならず、友人らと交流する、一緒に楽しむ、といった心理社会的な向上にも寄与しているようである。

しかし、果たして他の地域ではどうなのか、十分調べられたとは言い難く、さらなる調査が必要であろう。

## 4. 心理的問題への心理的・教育的介入

この領域の研究は見当たらなかった。

## 5. 女性

女性に注目した研究としては、先に挙げた Schäfer (1998)、Chingu et al (2013) がある。イスラーム圏では女性は夫以外の男性に肌を見せてはならないとされていることから、女性の受診率や治療完遂率や障害率に関心もたれてきた。しかし上述したように、チャドでは女性は男性より治療が遅れるわけではないことを Schäfer (1998) が示している。ただし離婚率は女性のほうが高いとしている。

総じて研究は乏しく、特にイスラーム圏における女性の問題についてさらなる調査が必要であろう。



## V. 中部・南部アフリカのハンセン病者および同治療者以外の人びとを対象とした調査や研究

### 1. 医療・保健従事者を対象とした調査や研究

医療・保健従事者を対象とした調査としては、Kumaresan & Maganu (1994b)<sup>5-1-1</sup>によるものと Ukpe (2006)<sup>5-1-2</sup>によるものがある。前者は、ボツワナ北西部の医療従事者99名に面接を行い、ハンセン病に関する知識と同病者に対する態度を調べたもので、ハンセン病の原因に関する知識は総じて欠落しており、回答者の大多数は病気が治療可能なことを知っていたが、正しい治療期間を知っていたのは半数以下であること、また三分の一以上は、患者は隔離されるべきと考えていることを明らかにした。その上で、コミュニティ、患者、医療従事者の教育が重要とした。

また後者は、ハンセン病をめぐる医療が一般医療に統合された今日における南アフリカの一次医療従事者（PHCワーカー）52名の知識（原因や感染経路や症状や治療など）、およびハンセン病治療へのかかわりの実態を調べたものである。PHCワーカーは総じてハンセン病の臨床的基本知識を持っておらず、病者が少なくなっていることもあって、ハンセン病治療に携わることも少ないことを指摘し、PHCワーカーへの教育や指導が望まれるとした。そのうえで、Ukpe (2008)<sup>5-1-3</sup>は、そうした医療従事者向けのポスターを作成している。

しかしながら総じて調査や研究は乏しい。ハンセン病者がきわめて少なくなったこともあって、関心は低下しているようである。

### 2. 一般の人びとを対象とした調査や研究

一般の人びとを対象としたものとしては、Kumaresan & Maganu (1994a)<sup>2-16-1</sup>によるボツワナでの素描がある。Kumaresan & Maganuは、一般の人びと、病者の面倒をみている家族、伝統的治療師、宗教家、そして病者に面接を行い、さらに彼らをメンバーとするフォーカス・グループ・ディスカッションを行い、ハンセン病の知識や、

病因、受診行動、家族の負担などを調べた。その結果、知識は不足しており、同病を、「悪い血」による「血の病気」と考えていること、異状が見られた時は、まず家にあるもので治療を試み、ついで伝統医に診てもらい、それでだめなら、診療所の許を訪れること、病者は隔離されていないこと、ケアする女性は付加的な負担を経験していること、などを明らかにした。

しかしこれ以外にはこの分野の調査は見当たらず、今後為されるべきと考えられた。

## VI. 結語

ハンセン病に関して今後どのような心理社会研究また健康教育研究を推し進めればよいか、それを探るため、中部・南部アフリカでこれまでに行われてきた同領域での調査や研究を概観した。

この概観から、病者の生活状況や食物規定や葬り方の変化に焦点を合わせた調査や研究、またこの変化を念頭に置き患者らの心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

## 【注】

\*1-1) ブルンジはケニヤ、タンザニア、ウガンダ、ルワンダ、南スーダンとともに「東アフリカ共同体」に参加しており、東アフリカに含められることもある。

\*2-1) 厳密に言えば、現地における疾病概念が、今日の西洋医学のハンセン病の概念と一致しているわけではない。

\*2-2) ハンセン病は、ポルトガル語で *gafa*、カステイリヤ語で *gafedad* (*-dad* は名詞を作る接尾辞で、英語の *-ty* にあたる) といい、フックや鉤爪を意味するラテン語あるいはアラビア語に由来すると推測されている。アラビア語由来説については Corriente (2008)<sup>6-1</sup> の *gafo* の項参照。なお Corriente は、カステイリヤ語には *meselledad*, *malatía*, *lacería* など婉曲語が多いとしている。ちなみに *meselledad* の *meselle* は英語の *misery* にあたり、悲惨の意、*malatía* は英語の *malady*

にあたり、病気の意、laceria は英語の laceration にあたり、悲惨の意である。

- \*2-3) *ngamahuru* の *ngama* は太鼓（注 3-2 参照）、*huru* は大きい意。
- \*3-1) ケニヤ西部、ウガンダと国境を接し、ビクトリア湖に面するブシア（ルヒャ人が主に住む）ではハンセン病は *amagenge* と呼ばれ、ヤギやいくつかの魚類——*kamongo*, *otik-seu*, *odhadho*——による病とされているという（K'Okul 1991<sup>6-2</sup>）。*kamongo* と *otik-seu* はナマズの一種、*odhadho* はバーベルの一種らしい。若林（2016）にて触れなかったので、ここに記しておく。
- \*3-2) アフリカにおける伝統的医師については若林（2016）にて少し触れたが、助産師や接骨師などを除くと、主に薬草等を用いる術師と主に呪術を用いる術師に大別される。彼らは、*amaxwele*（コーサ語で、あるいはコーサ人社会で；以下同様）、*ngaka*（北ソト語、ソト語）、*nganga*（ベンダ語やショナ語）、*n'anga*（ツオンガ語）、*inyanga*（ズルー語やツオンガ語）、*amagqirha*（コーサ語）、*selaoli*（北ソト語、ソト語）、*mungome*（ベンダ語やツオンガ語）、*isangoma*（ズルー語；南アフリカ共和国では *sangoma*）などと呼ばれる。Janzen（1992）<sup>63</sup>によれば、*ganga* は医師や医術師、*goma* は、治療の際に用いられることの多い太鼓、ないしは太鼓打ちや踊りを意味するという。
- \*3-3) 西部アフリカでは、グリオという下流階級に属する歌い手ないし語り手の亡骸も大地に埋葬されず、バオバブの洞に投げ入れられたという。
- \*3-4) Bascom（1975）<sup>64</sup>の紹介では「病者の傷口 sores」に食べられたことになっている。

## 【文献】

- 1-1. 若林佳史（2013）中国におけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述。『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要・社会情報系），22: 73-105.
- 1-2. 若林佳史（2014）南アジアにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述。『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要・社会情報系），23: 77-120.
- 1-3. 若林佳史（2016）東アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述。『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要・社会情報系），25: 31-48.
- 1-4. 若林佳史（2017）西部アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究：文献綜述。『社会情報学研究』（大妻女子大学紀要・社会情報系），26: 35-58.
- 2-1-1. Chata NJ, Djimadoum SM, Keegan JM (2015) *Petit Dictionnaire de la Langue Ngambaye*. Morkeg Books. <<http://morkegbooks.com/Services/World/Languages/SaraBagirmi/pdfs/Ngambaye.pdf>>
- 2-1-2. 笹川陽平（2010）アフリカ チャド共和国 ハンセン病制圧活動。『甲田の裾』，81(4): 29-35.
- 2-1-3. Mihimit MD (2007) La lèpre dans les camps de réfugiés au Tchad. Dépistage actif. *Bull de l'ALLF*, 20: 10.
- 2-2-1. Taber CR (1965) *Dictionary of Sango*. Hartford Seminary Foundation. <[https://ia802601.us.archive.org/32/items/DictionaryOfSango/sango\\_dictionary.pdf](https://ia802601.us.archive.org/32/items/DictionaryOfSango/sango_dictionary.pdf)>
- 2-2-2. Bibeau G (1981) The circular semantic network in Ngbandi disease nosology. *Social Science and Medicine*, 15B (3): 295-307.
- 2-2-3. Samarin WJ (1966) *The Gbeya Language: Grammar, Texts, and Vocabularies*. University of California Press.
- 2-2-4. Baquillon G, Scandella B, Testa J, Desfontaines M, André J, Limbassa J (1992) Enquête sur la lèpre en République Centrafricaine, de 1982 à 1985, chez les pygmées Ba-Banzélé. *Acta Leprol*, 8(2): 71-78.
- 2-2-5. 笹川陽平（2012）中央アフリカ共和国でのハンセン病制圧活動。『菊池野』，62(2): 22-27.
- 2-3-1. Helmlinger P (1972) *Dictionnaire Duala-Français Suivi d'un Lexique Français-Duala*. Klincksieck. <<http://www.ddl.ish-lyon.cnrs.fr/projets/clhass/PageWeb/ressources/duala.pdf>>
- 2-3-2. Van de Velde M (n.d.) *A Description of Eton*. <<https://lirias.kuleuven.be/bitstream/1979/233/5/description+of+eton.pdf>>
- 2-3-3. Galley S (1964) *Dictionnaire Fang-Français et Français-Fang: Suivi d'une grammaire fang*. H. Messeiller.
- 2-3-4. Louis JP, Merlin M, Josse R, Trebucq A, Drevet D, Desfontaine M, Hamono B, Cuddy-Zitsamele R, Sima A, Hengy C, Gelas H, Cottenot F (1991)

- Enquêtes de prévalence de la lèpre dans 5 pays d'Afrique Centrale. *Acta Leprol*, 7(4): 347–350.
- 2-4-1. Bolekia J (2009) *Diccionario Español-Bubi / Bubi-Español*. Akal.
- 2-4-2. Brydan D (2017) Mikomeseng: Leprosy, legitimacy and Francoist repression in Spanish Guinea. *Social History of Medicine*, hxx094. <<https://doi.org/10.1093/shm/hxx094>>
- 2-5-1. Mondjo A (2006) La lutte contre la lèpre au Gabon. *Bull de l'ALLF*, 19: 5–7.
- 2-6-1. Ministère de la Santé et de la Population, République du Congo (2017) Célébration de la 64ème journée Mondiale des lepreux edition 2017. <<http://www.sante.gouv.cg/index.php?module=posts&action=show&idp=8&stat=no>>
- 2-6-2. Ordre de Malte France (2017) Une mission lèpre au Congo. <<https://www.ordredemaltefrance.org/actualites/2-non-categorise/1889-une-mission-lepre-au-congo.html>> 31 octobre 2017.
- 2-6-3. Douniama PW (2018) Journée mondiale des lepreux: de nombreux cas recensés dans le département de la Likouala. *Les Dépêches de Brazzaville*, 3119: 5.
- 2-7-1. Dereau L (1957) *Lexique Kikôngo-Français, Français-Kikôngo. D'après le dictionnaire de K. E. Laman*. Namur, A. Wesmael-Charlier.
- 2-7-2. Stapleton WH (1914) *Suggestions for a Grammar of "Bangala" The "Lingua Franca" of the Upper Congo with Dictionary*. 2nd edition, revised and enlarged. Baptist Missionary Society. <<https://ia800204.us.archive.org/23/items/suggestionsforgr00stap/suggestionsforgr00stap.pdf>>
- 2-7-3. Gbotokuma Z (2016) *A Polyglot Pocket Dictionary of Lingála, English, French, and Italian*. Cambridge Scholars Publishing.
- 2-7-4. *Dictionnaire Cilubà-Français*. <<http://www.ciyem.ugent.be/>>
- 2-7-5. Laman KE (1936) *Dictionnaire Kikongo-Français*. Institut Royale Colonial Belge.
- 2-7-6. Kellersberger ER (1932) Some facts about leprosy in the Katanga, Belgian Congo. *Lepr Rev*, 3(4): 162–164.
- 2-7-7. Muir E (1939) Belgian Congo. *Lepr Rev*, 10(1): 22–30.
- 2-7-8. Muir E (1940) The Bibanga Leper Settlement, Belgian Congo. *Lepr Rev*, 11(1): 25–28.
- 2-7-9. Dubois A, van Hoof L (1940) *La Lèpre au Congo Belge en 1938*. Institut Royale Colonial Belge.
- 2-7-10. Degotte J (1940) Epidemiological leprosy survey in the Nepoko, Kibali – Ituri District, Belgian Congo. *Int J Lepr*, 8(4): 421–444.
- 2-7-11. Kivits M (1956) *La Lutte Contre la Lèpre au Congo Belge en 1955*. Institut Royale Colonial Belge.
- 2-7-12. Peterson WJ (1967) *Another Hand on Mine: The story of Dr. Carl K. Becker of the Africa Inland Mission*. McGraw-Hill.
- 2-7-13. Mputu Luengu-B JN (2008) La République Démocratique du Congo a atteint en 2007 l'objectif d'élimination de la lèpre comme problème de santé publique. *Bull de l'ALLF*, 23: 4–5.
- 2-7-14. Van Breuseghem R (1938) La lèpre chez les pygmées. *Annales de la Société Belge de Médecine Tropicale*, 18(1): 135–137.
- 2-7-15. 笹川陽平 (2005) コンゴ民主共和国を訪問して。『青松』, 62(10): 2–8.
- 2-7-16. 笹川陽平 (2008) ハンセン病制圧活動・コンゴ民主共和国を訪問。『新生』, 60(3): 2–6.
- 2-7-17. 笹川陽平 (2008) ハンセン病制圧活動「ビグミー訪問記」。『多磨』, 89(3): 2–8.
- 2-7-18. 笹川陽平 (2008) コンゴ民主共和国におけるハンセン病制圧活動。『高原』, 64(10): 2–8.
- 2-7-19. 笹川陽平 (2015) ハンセン病制圧活動記—コンゴ民主共和国—。『多磨』, 96(9): 10–19.
- 2-8-1. Cox BE, Adamson M, Teusink MH (n. d.) *Dictionary: Kinyarwanda-Kirundi, English-Kinyarwanda*. <[http://fmcusa.org/historical/files/2011/06/Dictionary\\_LoRes\\_Kinyarwanda-English-English-Kinyarwanda.pdf](http://fmcusa.org/historical/files/2011/06/Dictionary_LoRes_Kinyarwanda-English-English-Kinyarwanda.pdf)>
- 2-8-2. Uwimana I, Bizimungu N, Ingabire F, Mukamukiye E, Sharangabo O, Ngabonziza SC, Kamanzi E (2017) Trends in leprosy case detection in Rwanda, 1995–2011: Analysis of 17 years of laboratory data. *Afr J Lab Med*, 6(1): 426.
- 2-8-3. Musabyimana G (2008) *Rwanda, le Mythe des Mots: Recherche sur le concept «akazu» et ses corollaires*. L'Harmattan.
- 2-8-4. Batsinduka R (2009) The Rwanda conflict. Carter J, Irani G, Volkan VD (eds) *Regional and Ethnic*

- Conflicts: Perspectives from the front lines*. Pearson Prentice Hall, pp.133–158.
- 2-9-1. Cox EE (1969) *Dictionary: Kirundi–English, English–Kirundi*. General Missionary Board of the Free Methodist Church.
- 2-10-1. *Dicionário Kimbundu–Português*. <<http://linguakimbundu.xpg.uol.com.br/>>
- 2-10-2. Gilchrist WS (1938) *Seven Years of Leper Work In Angola*. The Dondi Press. (*Nova Scotia Medical Bulletin*, 18(5): 258–267; 18(6): 325–328. 1939)
- 2-10-3. CEML Hospital (2011) Conquering leprosy in Angola. *Angola Rising*, February 3, 2011. <<http://angolarising.blogspot.jp/2011/02/conquering-leprosy-in-angola.html>>
- 2-10-4. Leite AS, Ré L, Sobral FDC, Pinto A, Santos A (1958) Relatório da missão de prospecção à lepra em Angola. *Anais Inst Med Trop*, 15(1): 335–356.
- 2-10-5. Byam PC (1997) *New Wine in a Very Old Bottle: Canadian Protestant Missionaries as Facilitators of Development in Central Angola 1886-1961*. Ph.D. Dissertation. The University of Ottawa.
- 2-10-6. Heywood LM (2000) *Contested Power in Angola, 1840s to the Present*. University of Rochester Press.
- 2-10-7. Burlingham K (2011) “*In the Image of God*”: A global history of the North American Congregational Mission Movement in Angola, 1879 – 1975. Ph.D. Dissertation. The State University of New Jersey.
- 2-10-8. 笹川陽平 (2004) アンゴラを訪問して. 『愛生』, 58(1): 24–30.
- 2-10-9. 笹川陽平 (2006) レソト王国, アンゴラ共和国, モザンビーク共和国を訪問. 『駿河』, 2006年秋号: 2–10.
- 2-10-10. Bule L (2017) Pacientes deixam tratamento no Sanatório de Menongue. *Jornal de Angola*, 2017/9/16.
- 2-11-1. *Free English–Bemba Dictionary*. <<http://kitweonline.com/kitweonline/discover-kitwe/culture/language/free-english-bemba-dictionary.html>>
- 2-11-2. Labrecque E (translated by Boyd P, edited by) *Beliefs and Religious Practices of the Bemba and Neighboring Tribes*. Language Centre. <<http://documentslide.com/documents/beliefs-and-religious-practices-of-the-bemba.html>>
- 2-11-3. *Silozi–English Dictionary*. <<http://www.barotseland.net/sil-eng2a.htm>>
- 2-11-4. Griffiths PG (1965) Leprosy in the Luapula Valley, Zambia: History, beliefs, prevalence and control. *Lepr Rev*, 36(2): 59–67.
- 2-11-5. Turner VW (1975) *Revelation and Divination in Ndembu Ritual*. Cornell University Press.
- 2-11-6. Harris AC (2016) *Tonga–English English–Tonga Dictionary and Phrasebook: To aide those learning Citonga*. <<https://www.slideshare.net/AaronHarris5/tongaenglishdictionary>>
- 2-11-7. Madan AC (1908) *Lenje Handbook: A short introduction to the Lenje dialect spoken in North-West Rhodesia*. Clarendon Press.
- 2-11-8. Smith EW, Dale AM (1920) *The Ila-Speaking Peoples of Northern Rhodesia*. Macmillan. <<https://archive.org/details/ilaspeakingpeopl00smit>>
- 2-11-9. Livingstone D (1857) *Missionary Travels and Researches in South Africa: Including a sketch of sixteen years’ residence in the interior of Africa, and a journey from the Cape of Good Hope to Loanda, on the west coast; thence across the continent, down the river Zambesi, to the eastern ocean*. John Murray.
- 2-11-10. Muir E (1940) Leprosy in Northern Rhodesia. *Lepr Rev*, 11(1): 18–24.
- 2-11-11. Liwoyo MB (2011) *Missionaries, the State of Leprosy in Zambia, 1893–1964*. Ph.D. Dissertation. The University of Zambia.
- 2-11-12. Kapata N, Chanda-Kapata P, Grobusch MP, O’Grady J, Bates M, Mwaba P, Zumla A (2012) Leprosy trends in Zambia 1991–2009. *Trop Med Int Health*, 17(10): 1289–1293.
- 2-11-13. Peach PG (1957) Mission hospitals in the Federation. 5. Mwami Mission of Seventh-Day Adventists. *Central African Journal of Medicine*, 3(4): 145.
- 2-11-14. Siamwiza B (1998) *A History of Famine in Zambia c. 1825–1949*. Ph.D. Dissertation. Cambridge University. (Liwoyo 2011<sup>211-11</sup>による)
- 2-11-15. 笹川陽平 (2009) ザンビアにおけるハンセン病制圧活動. 『始良野』, 2009年秋季号: 12–15.
- 2-11-16. 姜明江 (2015) 故郷に出会うまで—ザンビアのハンセン病回復者のライフストーリー. 新山智基 (編) 『アフリカの病・医療・障害の現場から—アフリカセミナー『目の前のアフリカ』で

- の活動を通じて』(生存学研究センター報告23), 立命館大学生存学研究センター, pp.51-67.
- 2-12-1. Paas S (2003) *Chichewa/Chinyanja-English Dictionary (Chichewa/Chinyanja-Chingerezi mtanthauzira mawu)*. Christian Literature Association in Malawi.
- 2-12-2. Muir E (1940) Leprosy in Nyasaland. *Lepr Rev*, 11(1): 9-17.
- 2-12-3. Molesworth BD (1968) Malawi leprosy control project. *Society of Malawi Journal*, 21(1): 58-69.
- 2-12-4. Linden I (1974) *Catholics, Peasants and Chewa Resistance in Nyasaland, 1889-1939*. Heinemann Educational.
- 2-12-5. Iliffe J (1985) The poor in the modern history of Malawi. *University of Centre of African Studies, University of Edinburgh (ed) Malawi: An alternative pattern of development*, pp.245-292.
- 2-12-6. Good CM Jr (2004) *The Steamer Parish: The rise and fall of missionary medicine on an African frontier*. University of Chicago Press.
- 2-12-7. Chingu D, Duncan M, Amosun S (2013) The quality of life of people with leprosy-related residual impairment and disability in Malawi – is there a difference between people living in a leprosarium and those re-integrated into their communities? *Lepr Rev*, 84(4): 292-301.
- 2-12-8. Leprosy at Utale Village PLUS. <<http://luvcharity.org/>>
- 2-12-9. 笹川陽平 (2011) アフリカ・マラウイでのハンセン病制圧活動. 『駿河』, 2011年秋号: 2-7.
- 2-13-1. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Emakhuwa Emarevonii*. <[http://lidemo.net/2010/docs/xmc\\_v000367.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/xmc_v000367.pdf)>
- 2-13-2. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Emakhuwa (Central)*. <[http://lidemo.net/2010/docs/vmw\\_p000565.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/vmw_p000565.pdf)>
- 2-13-3. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Emakhuwa Emeetto*. <[http://lidemo.net/2010/docs/mgh\\_p000577.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/mgh_p000577.pdf)>
- 2-13-4. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Elomwe*. <[http://lidemo.net/2010/docs/ngl\\_p000554.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/ngl_p000554.pdf)>
- 2-13-5. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Echuwabu*. <[http://lidemo.net/2010/docs/chw\\_p000351.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/chw_p000351.pdf)>
- 2-13-6. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Shimakonde*. <[http://lidemo.net/2010/docs/kde\\_p000347.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/kde_p000347.pdf)>
- 2-13-7. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Cindau*. <[http://lidemo.net/2010/docs/ndc\\_p000929.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/ndc_p000929.pdf)>
- 2-13-8. *Línguas de Moçambique: Vocabulário de Kiimwani*. <[http://lidemo.net/2010/docs/wmw\\_v000648.pdf](http://lidemo.net/2010/docs/wmw_v000648.pdf)>
- 2-13-9. Deepak S, Hansine PE, Braccini C (2013) Self-care groups of leprosy-affected people in Mozambique. *Lepr Rev*, 84(4): 283-291.
- 2-13-10. Zamparoni V (2017) Leprosy: Disease, isolation, and segregation in colonial Mozambique. *Hist. Cienc. Saude-Manguinhos* [online]. 24(1): 13-39. <[http://www.scielo.br/pdf/hcsm/v24n1/en\\_0104-5970-hcsm-S0104-59702016005000028.pdf](http://www.scielo.br/pdf/hcsm/v24n1/en_0104-5970-hcsm-S0104-59702016005000028.pdf)>
- 2-13-11. Palhota MA (2012) *Lepra em Namaíta, Província de Namputa: Uma reflexão sobre representações socioculturais*. Universidade Eduardo Mondlane. <<http://196.3.97.216/bitstream/10857/3941/1/RELATORIO%20PARA%20ENTREGAR-ALZIRA.pdf>>
- 2-13-12. 笹川陽平 (2005) ハンセン未制圧国・モザンビークを訪問して. 『高原』, 61(8): 2-7.
- 2-13-13. 笹川陽平 (2010) モザンビーク ハンセン病との闘い. 『愛生』, 64(5): 12-16.
- 2-14-1. Monot M, Honoré N, Garnier T, Zidane N, Sherafi D, Paniz-Mondolfi A, Matsuoka M, Taylor GM, Donoghue HD, Bouwman A, Mays S, Watson C, Lockwood D, Khamesipour A, Dowlati Y, Jianping S, Rea TH, Vera-Cabrera L, Stefani MM, Banu S, Macdonald M, Sapkota BR, Spencer JS, Thomas J, Harshman K, Singh P, Busso P, Gattiker A, Rougemont J, Brennan PJ, Cole ST (2009) Comparative genomic and phylogeographic analysis of Mycobacterium leprae. *Nat Genet*, 41(12): 1282-1289.
- 2-14-2. *Rehefa Tsy Misy Dokotera*. <[http://hesperian.org/wp-content/uploads/pdf/mg\\_wtnd\\_2016/mg\\_wtnd\\_2016\\_14.pdf](http://hesperian.org/wp-content/uploads/pdf/mg_wtnd_2016/mg_wtnd_2016_14.pdf)>
- 2-14-3. Jully (1901) *Manuel des Dialectes Malgaches: Comprenant sept dialectes: hove, betsiléo, tankarana, betsimisaraka, taimorona, tanosy, dakalava (mahafaly) et le soahély*. Librairie africaine et coloniale. <<http://malagasyword.org/bins/>>

- homePage)
- 2-14-4. Kent RK (1968) Madagascar and Africa. *Journal of African History*, 9(3): 387–408.
- 2-14-5. Advier M (1936) La lèpre à Madagascar. *Int J Lepr*, 4(3): 337–342.
- 2-14-6. Grimes C (1950) Organization of the antileprosy campaign in Madagascar. *Int J Lep*, 18(2): 135–144.
- 2-14-7. Gow IA (1979) *Madagascar and the Protestant Impact: The work of the British Missions, 1818–95*. Longman & Dalhousie UP.
- 2-14-8. Sandmo S (2011) Confessionalised medicine. The Norwegian Missionary Society's Leprosy Narratives from Madagascar 1887–1907. Nielszen H et al. (eds) *Protestant Missions and Local Encounters in the Nineteenth and Twentieth Centuries: Unto the ends of the world*. Brill, pp.101–130.
- 2-14-9. *Bienheureux Pere Jean Beyzym SI*. <<http://beyzym.pl/category/leproserie/>>
- 2-14-10. 笹川陽平 (2004) マダガスカルを訪問して。『愛生』, 58(3): 23–25.
- 2-14-11. 笹川陽平 (2005) マダガスカルにおけるハンセン病制圧活動。『愛生』, 59(5): 6–9.
- 2-14-12. 笹川陽平 (2007) マダガスカル、モザンビークにおけるハンセン病制圧活動。『駿河』, 2007年夏号: 5–12.
- 2-14-13. Grainger CR (1980) Leprosy in the Seychelles. *Lepr Rev*, 51(1): 43–49.
- 2-14-14. Gaüzere BA, Aubry P (2013a) Histoire de la lèpre à La Réunion du début du XVIII<sup>e</sup> siècle à nos jours. *Med Sante Trop*, 23(2): 281–286.
- 2-14-15. Gaüzère BA, Aubry P (2013b) Histoire des épidémies et des endémoépidémies humaines dans le sud-ouest de l'océan Indien. *Med Sante Trop*, 23(2): 145–157.
- 2-15-1. Shoko T (2007) *Karanga Indigenous Religion in Zimbabwe: Health and well-being*. Ashgate.
- 2-15-2. Mavhunga CC (2014) *Transient Workspaces: Technologies of everyday innovation in Zimbabwe*. MIT Press.
- 2-15-3. Moiser B (1938) Leprosy in Southern Rhodesia. *Lepr Rev*, 9(3): 110–113.
- 2-15-4. Muir E (1940) Leprosy in Southern Rhodesia. *Lepr Rev*, 11(1): 29–36.
- 2-15-5. Aquina M (1969) A sociological analysis of Ngomahuru Isolation Hospital. *Zambezia*, 1(1): 69–85.
- 2-15-6. Rittey DA (1972) The story of a leprosy patient. *Cent Afr J Med*, 18(11): 230–232.
- 2-15-7. Lyons NF, Ellis BPB (1983) Leprosy in Zimbabwe. *Lepr Rev*, 54(1): 45–50.
- 2-15-8. Zvobgo CJ (1986) Medical missions: A neglected theme in Zimbabwe's history, 1893–1957. *Zambezia*, 13(2): 109–118.
- 2-15-9. Warndorff DK, Warndorff JA (1990) Leprosy control in Zimbabwe: From a vertical to a horizontal programme. *Lepr Rev*, 61(2): 183–187.
- 2-15-10. Mazarire GC (2007) A 'little England' in Chishanga: The fate of a British Empire leprosarium at Ngomahuru, 1925–1946. *African Historical Review*, 39(2): 1–24.
- 2-15-11. Mazarire GC (2009) *A Social and Political History of Chishanga: South-Central Zimbabwe c.1750–2000*. University of Zimbabwe.
- 2-15-12. Zvobgo CJM (2009) *A History of Zimbabwe, 1890–2000 and Postscript, Zimbabwe, 2001–2008*. Cambridge Scholars.
- 2-15-13. Wittenhorst B, Vree ML, Tenham PBG, Velema JP (1998) The National Leprosy Control Programme of Zimbabwe: A data analysis, 1983–1992. *Lepr Rev*, 69(1): 46–56.
- 2-16-1. Kumaresan JA, Maganu ET (1994a) Socio-cultural dimensions of leprosy in north-western Botswana. *Soc Sci Med*, 39(4): 537–541.
- 2-16-2. Dyke HW (1934) Leprosy in the Bechuanaland Protectorate. *Int J Lepr*, 2(4): 441–442.
- 2-17-1. *Namibia Biodiversity Database*. <<http://www.biodiversity.org.na/comnamedetails.php>>
- 2-17-2. Lebzelter V (1934) *Eingeborenenkulturen in Südwest- und Südafrika. Wissenschaftliche Ergebnisse einer Forschungsreise nach Süd- und Südwestafrika in den Jahren 1926–1928. (Rassen und Kulturen in Südafrika, 2)*, Hiersemann, p.232.
- 2-17-3. Loeb EM (1955) Kuanyama Ambo Magic: 1. Kwanyama witchcraft. *Journal of American Folklore*, 68(267): 35–50.
- 2-17-4. Nord C (2014) Healthcare and warfare. Medical space, mission and Apartheid in twentieth century Northern Namibia. *Med Hist*, 58(3): 422–446.
- 2-18-1. *Health Terminology (Multilingual South Africa)*.

- pdf. Language Inc. <<https://www.language-inc.org/pt/resources/Resources/...pdf/download>>
- 2-18-2. Bryant AT (1905) *A Zulu-English Dictionary with Notes on Pronunciation, A revised orthography and derivations and cognate words from many languages; including also a vocabulary of Hlonipa words, tribal-names, etc., a synopsis of Zulu grammar and a concise history of the Zulu people from the most ancient times* The Mariannah Mission Press.
- 2-18-3. Illman S (2014) *Illman's English / Zulu Dictionary and Phrase Book*. AuthorHouse.
- 2-18-4. McCoy WK Jr (2015) *Healing the Leper? Mission Christianity, Medicine, and Social Dependence in 20th Century Swaziland*. Boston University. <<http://hdl.handle.net/2144/16368>>
- 2-18-5. Junod HA (1913) *The Life of a South African Tribe, Volume II: The Psychic Life*. Imprimerie Attinger Freres. <<https://archive.org/details/lifeofsouthafric02junouoft>>
- 2-18-6. Kirsch B, Skorge S, Matsiliza N (1996) *An English-Xhosa Companion for Health-Care Professionals*. Juta and Company Ltd.
- 2-18-7. Schulz EJ, Pentz HHL (1970) Leprosy control in South Africa. *Lepr Rev*, 41(1): 15-19.
- 2-18-8. Scott FP (1977) The history of dermatology in South Africa. *Int J Dermatol*, 16(8): 694-699.
- 2-18-9. Van Zijl A (1989) History of Westfort Hospital. *Pretoriana, Journal of the Old Pretoria Society*, 96(11): 75-76.
- 2-18-10. La Trobe J (1894) *Work Among Lepers in South Africa and Jerusalem*. <<https://books.google.co.jp/books?id=pwJbAAAAQAAJ&printsec=frontcover&dq=inauthor:%22James+La+Trobe%22&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwj307Wz-MbYAhXHqJQKHb0gChYQuwUILTAA#v=onepage&q&f=false>>
- 2-18-11. Theal GM (1908) *History of South Africa since September 1795*. Vol.1. George Allen.
- 2-18-12. Macvicar N (1928) Leprosy Work in South Africa: a visit to Emjanyana. *Leprosy Notes*, 3: 24-26.
- 2-18-13. Jamison R (1934) A note on leprosy in Swaziland. *Int J Lepr*, 2(4): 443.
- 2-18-14. Strachan PD (1934) Leprosy and leprosy treatment in Basutoland. *Int J Lepr*, 2(4): 431-439.
- 2-18-15. Germond RC (1936) A study of the last six years of the leprosy campaign in Basutoland. *Int J Lepr*, 4(2): 219-224.
- 2-18-16. Muir E (1940a) Leprosy in Basutoland. *Lepr Rev*, 11(1): 37-42.
- 2-18-17. Muir E (1940b) Report on leprosy in the Union of South Africa. *Lepr Rev*, 11(1): 43-52.
- 2-18-18. Winter PD (1950) Leprosy and its control in South Africa. *Int J Lepr*, 18(1): 23-31.
- 2-18-19. Impey SP (1895) Leprosy in South Africa: a report on the facts as to the recent increase of leprosy at the Cape, and its prevalence in South Africa. Newman G et al. *Prize Essays on Leprosy*. The New Sydenham Society, pp.189-206. <<https://archive.org/details/cu31924012435933>>
- 2-18-20. Fish JW (1924) *Robben Island — The Home of the Leper: A narrative of thirty four years' Gospel work amongst lepers of South Africa*. Ritchie.
- 2-18-21. Fish, JW (1934) *In Journeyings Oft — Gospel work among lepers: The closing scenes on Robben Island*. Ritchie.
- 2-18-22. Deacon H (1994) Leprosy and racism at Robben Island. van Heyningen E (ed) *Studies in the History of Cape Town*, vol.7. History Department, University of Cape Town, pp.45-83.
- 2-18-23. Deacon H (1996a) Racial segregation and medical discourse in Nineteenth-century Cape Town. *Journal of Southern African Studies*, 22(2): 287-308.
- 2-18-24. Deacon H (1996b) The medical institutions on Robben Island 1846-1931. Deacon H (ed) *The Island: A history of Robben Island 1488-1990*. Mayibuye Books, pp.57-77.
- 2-18-25. Horwitz S (2006) Leprosy in South Africa: A case study of Westfort Leper Institution, 1889-1948. *African Studies*, 65(2): 271-295.
- 2-18-26. Kistner U (1998) The walls without and the walls within — leprosy and social control in South Africa. *Ber Wiss*, 21(4): 237-250.
- 2-18-27. 笹川陽平 (2005) 南アフリカのハンセン病史跡訪問記. 『青松』, 62(4): 20-25.
- 2-18-28. 笹川陽平 (2005) 南アフリカでの国際会議に出席して. 『多磨』, 86(5): 31-34.
- 3-1-1. Melland FH (1923) *In Witch-Bound Africa, An account of the primitive Kaonde tribe*. Seeley.
- 3-1-2. Richards AI (1939) *Land, Labour and Diet in*

- Northern Rhodesia: An economic study of the Bemba tribe.* Oxford University Press.
- 3-1-3. Moore RJB (1940) Bw Anga among the Bemba. *Africa: Journal of the International African Institute*, 13(3): 211–234.
- 3-1-4. *Biodiversité au Katanga*. <[http://www.bakasbl.org/en/animaux/index.php?id\\_animal=144&classe=260](http://www.bakasbl.org/en/animaux/index.php?id_animal=144&classe=260)>
- 3-1-5. Turner VW (1953) *Lunda Rites and Ceremonies. Occasional papers of the Rhodes–Livingstone Museum, No. 10.* Rhodes–Livingstone Museum. (Rhodes–Livingstone Museum 1974 *The Occasional Papers of the Rhodes–Livingstone Museum, Nos. 1–16, in One Volume.* Manchester University Press, pp.335–388)
- 3-1-6. Turner VW (1967) *The Forest of Symbols: Aspects of Ndembu ritual.* Cornell University Press.
- 3-1-7. Marks SA (1976) *Large Mammals and a Brave People: Subsistence hunters in Zambia.* University of Washington Press.
- 3-1-8. Stefaniszyn B (1964) *Social and Ritual Life of the Ambo of Northern Rhodesia.* Oxford University Press.
- 3-1-9. Muir E (1940b) The leprosy situation in Africa. *Journal of the Royal African Society*, 39(155): 134–142.
- 3-1-10. Missionary Atlas Project Africa Republic of Chad. <<http://worldmap.org/maps/other/profiles/chad/Chad%20Profile.pdf>>
- 3-1-11. Mackenzie DR (1925) *The Spirit–Ridden Konde: A record of the interesting but steadily vanishing customs & ideas gathered during twenty–four years' residence amongst these shy inhabitants of the Lake Nyasa region, from witch–doctors, diviners, hunters, fishers & every native source.* Seeley, Service & Co.
- 3-1-12. Hearsey H (1909) Leprosy in the Nyasaland Protectorate, British Central Africa. *Br Med J*, 2(2548): 1314–1315.
- 3-1-13. Silva MA (1975) Relatório dum inquérito epidemiológico sobre a lepra, nalgumas circunscções da província do Sul do Save. *África médica*, 9(1): 1–19. (Zamparoni 2017<sup>3-1-14</sup>による)
- 3-1-14. Zamparoni V (2017) Leprosy: disease, isolation, and segregation in colonial Mozambique. *Hist. Cienc. Saude–Manguinhos* [online], 24(1). <[http://www.scielo.br/pdf/hcsm/v24n1/en\\_0104-5970-hcsm-S0104-59702016005000028.pdf](http://www.scielo.br/pdf/hcsm/v24n1/en_0104-5970-hcsm-S0104-59702016005000028.pdf)>
- 3-1-15. Scott J (2000) The psychosocial needs of leprosy patients. *Lepr Rev*, 71(4): 486–491.
- 3-2-1. Junod HA (1912) *The Life of a South African Tribe, Volume I: The social life.* Imprimerie Attinger Freres. <<https://archive.org/details/lifeofsouthafric01junouoft>>
- 3-3-1. Colson E (2006) *Tonga Religious Life in the Twentieth Century.* Bookworld Pub.
- 3-4-1. Grinker RR (1994) *Houses in the Rainforest: Gender and ethnicity among the Lese and Efe in Zaire.* University of California Press.
- 3-4-2. Chatelain H (1894) *Folktales of Angola: Fifty tales, with Ki-mbundu text, literal English translation, introduction, and notes. (Memoirs of the American Folklore Society, I).* G.E. Stechert.
- 3-4-3. Tremearne AJN (1913) *Hausa Superstitions and Customs: An introduction to the folk-lore and the folk.* John Bale, Sons & Danielsson.
- 3-4-4. Guillot R (1933) Sadigali. *Contes d’Afrique. Numéro spécial du Bulletin de l’Enseignement de l’A.O.F.* Imprimerie du Gouvernement, pp.87–88.
- 3-4-5. Guillot R (1965) *Guillot’s African Folk Tales.* (translation by Gwen Marsh) F. Watts.
- 3-4-6. Görög V, Diarra A (1979) *Contes Bambara du Mali.* Publications orientalistes de France.
- 4-1-1. Chingu D, Duncan M, Amosun S (2013) The quality of life of people with leprosy-related residual impairment and disability in Malawi — is there a difference between people living in a leprosarium and those re-integrated into their communities? *Lepr Rev*, 84(4): 292–301.
- 4-3-1. Schäfer J (1998) Leprosy and disability control in the Guéra prefecture of Chad, Africa: do women have access to leprosy control services? *Lepr Rev*, 69(3): 267–278.
- 4-3-2. Deepak S, Hansine PE, Braccini C (2013) Self-care groups of leprosy-affected people in Mozambique. *Lepr Rev*, 84(4): 283–291.
- 5-1-1. Kumaresan JA, Maganu ET (1994b) Knowledge and attitude of health workers towards leprosy in north-western Botswana. *East Afr Med J*, 71(6): 366–367.
- 5-1-2. Ukpe IS (2006) A study of health workers’ knowledge and practices regarding leprosy care



- and control at primary care clinics in the Eerstehoek area of Gert Sibande district in Mpumalanga Province, South Africa. *SA Fam Pract*, 48(5): 16.
- 5-1-3. Ukpe IS (2008) Educational posters and leaflets on leprosy: raising awareness of leprosy for health-care workers in rural South Africa. *Public Health Rep*, 123(2): 217–221.
- 6-1. Corriente F (2008) *Dictionary of Arabic and allied loanwords: Spanish, Portuguese, Catalan, Galician and kindred dialects*. Brill.
- 6-2. K'Okul RNO (1991) *Maternal and Child Health in Kenya: A study of poverty, disease and malnutrition in Sarnia*. (Monograph of the Finnish Society for Development Studies No. 4) The Finnish Society for Development Studies. (<http://www.diva-portal.org/smash/get/diva2:273664/FULLTEXT01.pdf>)
- 6-3. Janzen JM (1992) *Ngoma: Discourses of healing in Central and Southern Africa*. University of California Press.
- 6-4. Bascom WR (1975) *African Dilemma Tales*. Mouton Pub.
-

## **Psychosocial Research and Health Education Research into Leprosy in Central and Southern Africa: A literature review**

YOSHIFUMI WAKABAYASHI

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

### **Abstract**

In order to investigate how best to proceed with both psychosocial and health education research into leprosy, or Hansen's disease, in the future, I carried out a research survey in the same field that have been conducted in Central and Southern Africa.

I made a proposal for the promotion of research as follows in light of this survey. That is, research focusing on the changes of living conditions, food restrictions, and burial practices of the affected persons, and basic psychosocial research and health education research with these changes in mind.

### **Key Words** (キーワード)

Leprosy (ハンセン病), Hansen's disease (ハンセン病), Central Africa (中部アフリカ), Southern Africa (南部アフリカ), Literature review (文献综述), Psychological problems (心理的問題), QOL (生活の質), Health education (健康教育), Gender (ジェンダー), Leprosy colony (コロニー), Attitude (態度), Stigma (ステイグマ), Segregation (隔離), Funeral (葬り), Food restrictions (食物規定), Medication compliance (服薬遵守), Help-seeking behavior (受診行動)

